

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第149集

月館跡・八幡館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

月館跡・八幡館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にとまなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成元年度に発掘調査した月館跡・八幡館跡の調査結果をまとめたものであります。月館跡・八幡館跡は和賀川右岸の河岸段丘に立地し、調査の結果、月館跡から中世の堀跡や柵列状柱穴列等の遺構が、また八幡館跡からは平安時代の堅穴住居跡が発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、和賀町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成2年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県和賀郡和賀町煤孫、山口地区に所在する月館跡、八幡館跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北横断自動車秋田線の建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 遺跡台帳番号、調査期間、発掘調査面積、調査担当者は、各遺跡の中扉に記したとおりである。
4. 発掘調査に際しては、和賀町教育委員会の御協力をいただいた。
5. 鑑定・分析のうち、石質の鑑定は佐藤地質研究所の佐藤二郎氏、火山灰の分析は奈良教育大学三辻利一氏に依頼した。
6. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

I 調査に至る経過	佐々木嘉直
II 遺跡の位置と環境	中川 重紀、村上 修、中村 良一、鈴木 貞行
III 調査と室内整理の方法	中川 重紀、鈴木 貞行
IV 月館跡	鈴木 貞行
V 八幡館跡	中川 重紀
7. 現地調査においては地元和賀町の方々に、室内整理では整理作業員の協力を得た。
8. 調査の諸記録と遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序 例 言

本 文

I 調査に至る経過	1	⑦ 遺構外の出土遺物	24
II 遺跡の位置と環境	1	(2) その他の遺構と出土遺物	25
1. 遺跡の位置	1	① 陥し穴状遺構	25
2. 地形概観	2	② 土坑	30
3. 基本土層	5	③ 溝跡	31
4. 周辺の遺跡	7	④ 遺構外の出土遺物	31
III 調査と室内整理の方法	11	2. まとめ	36
1. 野外調査	11	3. 分析・鑑定	38
2. 室内整理	12	V 八幡館跡	39
IV 月館跡	13	1. 検出された遺構と出土遺物	43
1. 検出された遺構と出土遺物	17	(1) 住居跡	43
(1) 館跡に伴う遺構と遺物	17	(2) 土坑	56
① 堀跡	17	(3) 陥し穴	60
② 楕円状柱穴列	17	(4) 焼土	62
③ 土塁状遺構	17	(5) 溝跡	63
④ 柱穴	23	(6) 遺構外の出土遺物	65
⑤ 柱穴状小土坑	23	2. まとめ	80
⑥ 溝跡	24		

図 版

第1図 遺跡位置図		第4図 八幡館跡土層柱状図	5
第2図 調査周辺地形図	3	第5図 周辺の遺跡位置図	9
第3図 月館跡土層柱状図	5	第6図 凡例	12

月 館 跡

第1図 月館跡遺構配置図……………15	第14図 H 6 陥し穴状遺構……………27
第2図 土壘状遺構・溝跡No. 3……………18	第15図 B 13陥し穴状遺構……………27
第3図 郭・堀跡・堀跡断面……………19	第16図 E 18陥し穴状遺構……………28
第4図 櫛列状柱穴列……………21	第17図 F 22陥し穴状遺構……………28
第5図 柱穴……………23	第18図 H 12陥し穴状遺構……………29
第6図 柱穴状小土坑……………23	第19図 I 13陥し穴状遺構……………29
第7図 小土坑No. 11出土遺物……………24	第20図 C 16陥し穴状遺構……………30
第8図 遺構外出土遺物(陶磁器)……………24	第21図 D 20土坑……………30
第9図 B 11陥し穴状遺構……………25	第22図 H 5 土坑……………31
第10図 C 10陥し穴状遺構……………25	第23図 遺構外出土遺物(土器1)……………33
第11図 J 21陥し穴状遺構……………26	第24図 遺構外出土遺物 (土器2・土製品)……………33
第12図 E 22陥し穴状遺構……………26	第25図 遺構外出土遺物(石器)……………35
第13図 C 8 陥し穴状遺構……………27	

八 幡 館 跡

第1図 八幡館跡遺構配置図……………41	第17図 E 26土坑No. 3……………60
第2図 E 27住居跡……………45	第18図 C 29陥し穴状遺構No. 1……………60
第3図 E 27住居跡出土遺物1……………46	第19図 C 29陥し穴状遺構No. 2……………61
第4図 E 27住居跡出土遺物2……………47	第20図 E 26陥し穴状遺構No. 1……………61
第5図 H 23住居跡……………49	第21図 E 26陥し穴状遺構No. 1出土遺物……………61
第6図 H 23住居跡出土遺物……………50	第22図 H 26陥し穴状遺構……………62
第7図 H 26住居跡・出土遺物……………52	第23図 F 26焼土……………63
第8図 I 25住居跡……………53	第24図 溝跡……………64
第9図 I 25住居跡出土遺物1……………55	第25図 遺構外出土遺物1……………67
第10図 I 25住居跡出土遺物2……………56	第26図 遺構外出土遺物2……………69
第11図 B 31土坑……………57	第27図 遺構外出土遺物3……………72
第12図 F 23土坑No. 2……………57	第28図 遺構外出土遺物4……………73
第13図 F 26土坑No. 2……………58	第29図 遺構外出土遺物5……………74
第14図 E 26土坑No. 2出土遺物……………58	第30図 遺構外出土遺物6……………75
第15図 F 23土坑No. 1……………59	第31図 遺構外出土遺物7……………76
第16図 F 23土坑No. 1出土遺物……………59	第32図 遺構外出土遺物8……………77

表

第1表周辺の遺跡一覧表……………8 <div style="text-align: center; margin: 5px 0;">月 館 跡</div> 石器一覧表……………36 <div style="text-align: center; margin: 5px 0;">八 幡 館 跡</div> E27住居跡土器観察表……………47 H23住居跡土器観察表……………50 H26住居跡土器観察表……………52	I25住居跡土器観察表……………56 E26土坑No.3土器観察表……………58 F23土坑No.1土器観察表……………59 E26陥し穴土器観察表……………61 遺構外土器観察表……………77 石器一覧表……………79
---	---

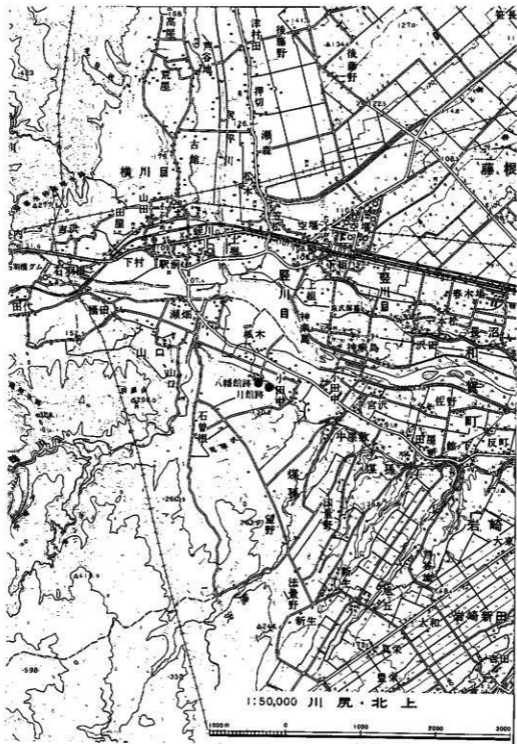
写 真 図 版

月 館 跡

写真図版1 月館跡・八幡館跡遠景……………85 写真図版2 月館跡・八幡館跡空中写真……………86 写真図版3 遺跡全景・調査区近景……………87 写真図版4 調査区全景（完掘後）他……………88 写真図版5 掘跡・溝列・柱穴……………89 写真図版6 堀跡土層断面……………90	写真図版7 陥し穴状遺構(1)……………91 写真図版8 陥し穴状遺構(2)……………92 写真図版9 陥し穴状遺構(3)……………93 写真図版10 土坑・土塁状遺構・溝跡……………94 写真図版11 土器・鉄製品・陶磁器他……………95 写真図版12 石器……………96
---	--

八 幡 館 跡

写真図版1 現状・作業風景・基本土層……………99 写真図版2 E27住居跡……………100 写真図版3 H23・26住居跡……………101 写真図版4 I25住居跡……………102 写真図版5 土坑・陥し穴状遺構……………103 写真図版6 溝跡・焼土・ 遺物出土状況……………104 写真図版7 土器1・土製品・鉄製品……………105 写真図版8 土器2……………106	写真図版9 土器3……………107 写真図版10 土器4・土製品・古銭……………108 写真図版11 石器1……………109 写真図版12 石器2……………110 写真図版13 石器3……………111 写真図版14 石器4……………112 写真図版15 石器5……………113
---	--



第1図 月館跡・八幡館跡位置図

I 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市で東北縦貫自動車道青森線から分岐し、和賀町・湯田町を經由して秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち第9次、10次施行命令区間は延長33.9kmで、北上ジャンクションから秋田県境までの区間である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地について、岩手県教育委員会は昭和56年から分布調査を行っており、取扱いについては日本道路公団仙台建設局との間で協議された。協議の経過は以下のとおりである。

昭和62年4月13日付け「仙建北工第35号」による分布調査の依頼

5月25日付け「教文第117号」による分布調査結果の回答

昭和63年9月9日付け「教文第320号」による平成元年度における発掘調査事業の照会

9月16日付け「仙建北工第515号」による平成元年度発掘調査事業の回答

昭和63年12月27日及び平成元年1月21日 日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の3者による埋蔵文化財調査に関する協議

これにより、岩手県教育委員会は調整のうえ、平成元年度に柳上遺跡、岩崎台地遺跡群、岩崎城西遺跡、梅の木台地Ⅰ・Ⅱ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡、石曾根遺跡、月館跡、八幡館跡、八幡野Ⅱ遺跡、田中館跡、越中畑Ⅴ遺跡の13遺跡、合計92,000㎡の調査を岩手県文化振興事業団の委託事業にすることとした。

これをうけて当埋蔵文化財センターは、平成元年4月1日付け委託契約により、発掘調査に着手したものである。しかし、用地内の買収未了や保安林解除の遅延により、梅ノ木台地Ⅱ遺跡と越中畑Ⅴ遺跡は調査に着手できなかった。また、同様の理由により梅ノ木台地Ⅰ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡の3遺跡では、調査区域の一部を平成2年度までの継続調査とした。

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置（第1図）

月館跡・八幡館跡はいずれも和賀郡和賀町にあり、和賀川南岸の段丘崖を浸食して北東に流れる「だの沢」を狭んで隣接し、東日本旅客鉄道北上線堅川目駅の南約2km、和賀町役場から南南東約2kmに位置する。2遺跡は北緯39度17分10秒～25秒、東経140度59分20秒～59分40秒の間にある。それぞれの所在地番はそれぞれ煤孫1地割1-10ほか、山口46地割67-161ほかである。和賀町は岩手県中央部、奥羽山脈東麓の北上盆地の中央部西方に位置し、町内中央部を東流する和賀川中流域の沖積地と段丘面に立地する。東側に江釣子村、北上市、西は湯田町、

沢内村、北側に花巻市、南は胆沢郡金ヶ崎町、胆沢町に隣接する。煤森、山口地区は和賀町の南部に位置し、和賀川が北境となり、東側は岩崎新田や山岳地帯、西は岩沢に接し、和賀川の南岸沿いの沖積地と段丘面上にある。

2. 地形概観 (第2図)

遺跡のある和賀郡は、西は奥羽山脈の三森山(1,120m)、真昼岳(1,060m)、和賀岳(1,140m)、などの山々が、北はモッコ岳(1,278m)、那須倉山(941m)、東根山(928m)などの山々が、南は牛形山(1,340m)、駒ヶ岳(1,130m)などの山々が峰を連ねる。東は北上高地の西辺にあたり、低い丘陵が南北に続いている。和賀郡は以上のように大凡西高東低の地形であり、和賀町は、この郡の中では西部の山岳がつきあたるあたりから東よりに位置している。

和賀町内を東流する和賀川は、秋田県仙北郡と境する和賀岳に源を發し、途中北本内川・尻平川・鈴鴨川・夏油川などの諸支流と合流し、北上市に合流する。和賀川下流域沿岸は下方浸食と曲流が顕著で、多くの段丘がよく発達しており、これらは高位から順に仙人段丘・岩沢高位段丘・菱内段丘・網取段丘・切留段丘・横川目段丘の7段に区分される。

今回調査した遺跡は、上記段丘群のうち和賀川南岸、和賀川支流の鈴鴨川と荒屋沢にはさまれた「岩沢段丘」の崖縁辺に立地する。この岩沢段丘は、和賀川下流沿岸で最もよく発達しており、和賀川の河岸平野面より階段状に高く形成されていることから、明瞭に識別される。堆積物は5~10mの厚さの円礫層とその上に続く1~2m以内の粘土質土ないし砂質層より成り、北上川中流域の「金ヶ崎段丘」に連続する。

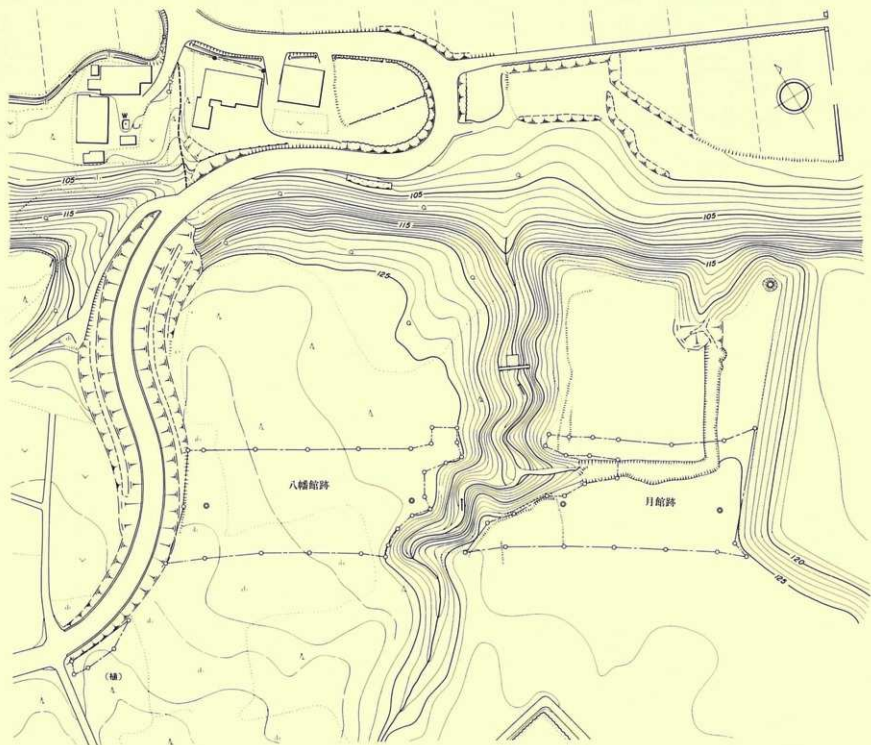
さらに、本遺跡の立地する段丘面は、遺跡の西側を流れる鈴鴨川による崖錐性堆積物に被われ、この堆積物が扇状地を形成し、その扇端部是和賀川によって浸食を受けている。西側の八幡野Ⅱ遺跡にかけては、この鈴鴨川の堆積物とみられる直径10~30cmの円礫が、黒褐色の表土直下に浮き上がって散見される。

遺跡周辺はほぼ平坦であるが、北東流する鈴鴨川とだの沢・荒屋沢等の小沢によって深く浸食されており、その開折された自然地形を利用するように、荒屋沢と西方のだの沢にはさまれた河岸段丘上に月館跡、だの沢を隔てて八幡館跡、さらに西方の八幡野Ⅱ遺跡をはさんで鈴鴨川東岸段丘の舌状台地に田中館跡が段丘崖沿いに並ぶ。

遺跡の標高は120~130m前後であり、和賀川との比高は約27mである。調査区の現状は山林であるが、一部の区域は以前には畑地として利用されていた。

<参考・引用文献>

- | | | |
|------------|--------|--|
| 中川久夫他 | (1971) | 『北上沿線の段丘群』【東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告】第71号別冊 |
| 岩手県 | (1975) | 『土地分類基本調査 北上』岩手県企画開発室 |
| 岩手県和賀町 | (1977) | 『和賀町史』 |
| 和賀町教育委員会 | (1983) | 『堀川館遺跡』岩手県和賀町文化財報告書57年度第2集 |
| 岩手県文化振興事業団 | (1989) | 『下岩沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第141集 |



第2図 調査周辺地形図

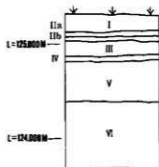
3. 基本層序

月館跡と八幡館跡の基本層序は基本的には共通するが、以下遺跡別に層序の概略を述べる。

月館跡 (第3図)

土層柱状図はG16区で作成したものである。

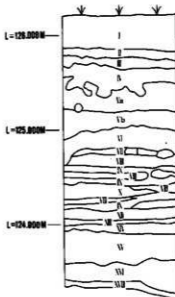
- I 層 黒褐色土 (7.5YR2/2) 現表土で遺跡全面を覆っている。木根が多く、炭化物粒が混入している。層厚は10~35cm。
- II a 層 黒褐色土 (7.5YR2/2) 調査区中央部で確認できる層で帯状に褐色土の粒が含まれる。硬くしまっている。
- II b 層 黒褐色土 (7.5YR2/2) 上記II a層と基本的に同じであるが、褐色土が含まれない。
- III 層 黒色土 (7.5YR2/1) 遺物が多く出土している。しまりが弱い。層厚は10~20cm。
- IV 層 黒褐色土~暗褐色土 III層からV層への漸移層。層厚は8~20cm。
- V 層 褐色土 (10YR4/6) シルト質土。層厚は20~50cm。上面が遺構検出面。
- VI 層 黄褐色土 (10YR5/8) 砂質土。



第3図 月館跡土層柱状図

八幡館跡 (第4図)

- I 層 黒褐色土 (7.5YR2/2) 表土層。柔らかく締まりけのないサラサラした土で炭化物粒が入るシルト、本層上部で土器、石器が出土する。表面は腐植土が10cmの厚さに見られる。層厚14~50cm。
- II 層 黒褐色土 (7.5YR3/2~4/3) 柔らかく本層上面には焼土粒が見られる。炭化物粒が混入する焼土は主に東側に見られる。層厚0~20cm。
- III 層 黒色土 (7.5YR2/1) シルト質土。漸移層。V層が僅かに混入している。木根による攪乱が顕著である。層厚9~20cm。
- IV 層 黒褐色土~暗褐色土 (7.5YR2/2~3/3) 漸移層。木根による攪乱が多い層である。III層とV層



第4図 八幡館跡土層柱状図

の混合土。層厚30~10cm。

- V a 層 黄褐色土 (10YR5/6) シルト質土。粒子が細かい。層厚30cm前後。
- V b 層 黄褐色土 (10YR5/6) シルト質土。粒子が上層より多く、粒子も荒くザラザラしている。上層より締まりが良い。層厚20cm前後。
- VI 層 黄褐色土礫層 (10YR5/4) 礫は1~10cm大の円礫で礫の多くは水平に堆積する。西側は厚く堆積し、礫も20cm以上のものが多い。砂は見られない。層厚は0~4 m以上と思われる。
- VII 層 黄褐色土 (2.5YR5/4) 砂土。径5mm大の礫を含む層で非常に堅い。
- VIII 層 黄褐色土 (2.5YR5/4) 砂土。粒子の細かい砂で上層よりやや柔らかい。
- IX 層 黄褐色土 (2.5YR6/6) シルト質土。若干の水酸化鉄斑が見られる。柔らかい。
- X 層 黄褐色土 (2.5YR5/4) 砂土。比較的堅い。
- XI 層 黄褐色土 (2.5YR5/4) 砂土。柔らかい。IX層のシルトが混じる。
- XII 層 におい黄褐色土 (2.5YR6/4) 砂土。柔らかい。水酸化鉄が薄く互層に沈澱している。
- XIII 層 明褐色土 (7.5YR5/6) シルト質土。粘土とシルトの混合土で水酸化鉄の沈澱が多い。
- XIV 層 におい黄褐色土 (2.5YR6/3) 粘土質土。水酸化鉄斑が見られる。
- XV 層 におい黄褐色土 (10YR5/4) シルト質土。砂粒が多く、水酸化鉄斑が見られる。
- XVI 層 浅黄色土 (2.5YR7/3) シルト質土。水酸化鉄斑が見られる。
- XVII 層 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘土質土。水酸化鉄斑が見られる。
- XVIII 層 褐色土 (10YR4/6) 粘土質土。堅く締まっている。
- これ以下は岩盤に続いていると思われる。

4. 周辺の遺跡（第5図、第1表）

和賀町には現在120カ所をこえる遺跡が登録されているが、第5図、第1表にはその一部と江釣子村及び北上市の一部を掲載した。和賀川を中心として遺跡の分布をみると、和賀川左岸では、中位段丘やその縁辺部及び開折された小支谷沿いに縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地にも若干認められる。調査されたおもな遺跡としては、鳩岡崎遺跡（縄文、奈良～平安時代の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器等、新平遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等）、藤沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、溝状土坑、縄文土器等）、九年橋遺跡（縄文土器）等があげられる。また、低位段丘上や低位段丘に沿って河岸低地上に形成された自然堤防上には、奈良～平安時代にかけての遺跡が多く分布する傾向が認められる。調査されたおもな遺跡としては、下谷地遺跡（縄文土器、土師器、須恵器）、長沼古墳群（古墳13基、鉄刀、勾玉、切子玉等）、猫谷地古墳群、五条丸古墳群等があげられる。

和賀川右岸では、丘陵縁辺部や中・低位段丘上、および開折された支谷に沿って縄文時代～平安時代の遺跡が分布し、段丘の北側縁辺部には湧泉や深く入り込んだ沢や急崖を利用した城館遺跡が分布している。調査された主な遺跡としてはまず和賀仙人遺跡があげられる。この遺跡は昭和40年と翌年の二次にわたって調査が行われ、段丘構成層から旧石器が出土している。そのほか、低位段丘上に立地する下岩沢Ⅰ遺跡（土坑、縄文土器、弥生土器等）、岩崎城跡（土壘、溝、掘立建物跡、中近世の陶器等）、梅ノ木遺跡（縄文・古代・中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器等）、成沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土師器等）がある。中位段丘上に立地する遺跡としては下成沢遺跡（旧石器、縄文土器、土師器等）、上大谷地遺跡（平安時代の竪穴住居跡、縄文土器、土師器等）等があげられる。

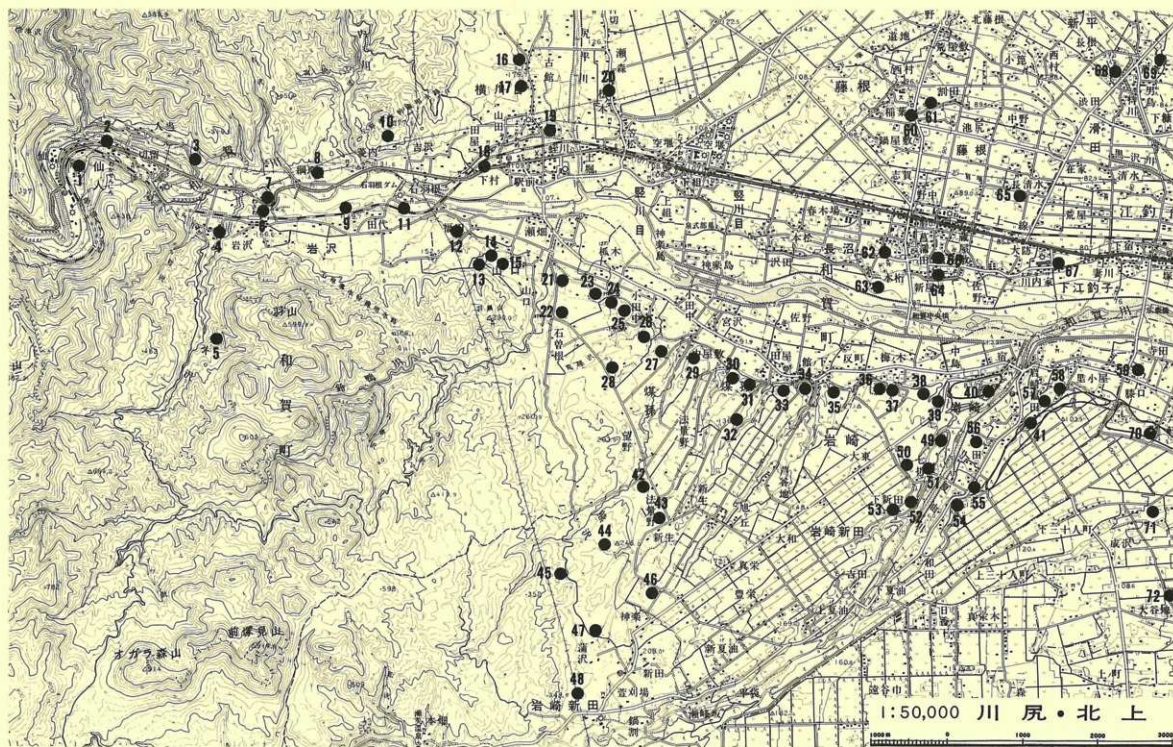
また、平成元年度には自動車道建設に関連して低位段丘の縁辺部に立地する10カ所の遺跡が調査されている。調査の結果、田中館跡（土坑、縄文土器、土師器等）、八幡野Ⅱ遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、縄文土器等）、本郷遺跡（縄文・平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等）、石曾根遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等）、兵庫館跡（建物跡、弥生土器等）、梅ノ木台地Ⅰ遺跡（平安時代の竪穴住居跡、陥し穴状遺構、縄文土器等）、岩崎台地遺跡群（平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、土師器、須恵器等）、岩崎城西遺跡（溝跡、柱穴列、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等）の遺構・遺物が発見されている。

<参考文献>

- | | | |
|------------|--------|---------------------------------------|
| 岩手県教育委員会 | (1981) | 『東北自動車道関係福蔵文化財調査報告書Ⅻ』岩手県文化財調査報告書第58集 |
| 岩手県教育委員会 | (1982) | 『東北自動車道関係福蔵文化財調査報告書ⅩⅤ』岩手県文化財調査報告書第70集 |
| 岩手県教育委員会 | (1982) | 『東北自動車道関係福蔵文化財調査報告書ⅩⅧ』岩手県文化財調査報告書第72集 |
| 岩手県文化振興事業団 | (1985) | 『新平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団福蔵文化財調査報告書第91集 |
| 和賀町教育委員会 | (1978) | 『長沼古墳』 |
| 江釣子村教育委員会 | (1978) | 『猫谷地・五城丸古墳群』（増補再刊） |
| 岩手県和賀町 | (1977) | 『和賀町史』 |
| 和賀町教育委員会 | (1989) | 『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅰ』和賀町文化財報告書第18集 |

第1表 周辺の遺跡一覽表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	和賀仙人	敷布地	旧石器	仙人1地割					
2	切替I	敷布地	縄文土器(中・後期)	仙人字切替	37	梅ノ木 台地Ⅱ	集落跡	縄文土器	岩崎9地割
3	人当I	敷布地	縄文土器(中期)・石 斧・石鏃・石匙	仙人第9地割	38	梅ノ木 台地Ⅰ	集落跡	縄文土器	岩崎10地割
4	法ヶ松I	敷布地	縄文土器・石斧・石匙	岩沢字法ヶ松	39	岩崎城西	敷布地	縄文土器・磁器	岩崎10地割
5	水沢館	館跡	中世	岩沢第8地割	40	岩崎城	館跡	銅鉄鏡・縄文土器(中 ～晚期)・鉄塊・鉄片	岩崎18地割
6	岩沢I	敷布地	縄文土器(後・晩期) 石鏃	岩沢	41	岩崎台地 遺跡群	集落跡	竪穴住居跡・土師器・ 須恵器	岩崎12地割I II
7	下岩沢I	集落跡	土坑・縄文土器・弥 生土器	岩沢字板田	42	望野Ⅰ	敷布地	縄文土器(中期) 石鏃・石斧	煤孫3地割
8	鳥谷森	敷布地	縄文土器(晩期)・石 鏃・石匙	横川目字鳥谷 森	43	望野Ⅱ	集落跡	縄文土器(前・後期) 尖頭器・石斧・旧石器	煤孫4地割
9	岩沢宮	館跡	縄文土器・陶器	下仙人9地割	44	代官森Ⅱ	敷布地	縄文土器・石器	岩崎新田4地割
10	愛宕山	敷布地	縄文土器・石器	横川目5地割	45	代官森Ⅰ	敷布地	土坑・石器	岩崎新田4地割
11	田代	集落跡	縄文土器(晩期)・石 鏃・石鏃・石器	山口字田代	46	神森Ⅱ	敷布地	縄文土器・石器	岩崎新田5地割
12	福田	敷布地	縄文土器(中・晩期)・ 石鏃	山口	47	清沢	敷布地	縄文土器	岩崎新田2地割
13	馬場館	館跡	中世	山口23・24	48	水神	敷布地	縄文土器・石斧・石匙	岩崎新田2地割
14	桶田原	塚		山口23	49	七折館	館跡	中世	岩崎15地割
15	山口原	館跡	中世	山口45・46	50	花曾根上	集落跡	縄文土器・土師器・ 須恵器	岩崎5地割
16	八幡館	館跡	縄文土器(晩期) 弥生土器・石器	横川目7地割	51	七新	集落跡	縄文土器(中・後・晩 期)・石器・紡績車	岩崎5・15地割
17	籠森	敷布地	縄文土器(中・後期)・ 石匙	横川目字山田 籠森	52	花曾根	敷布地	須恵器	岩崎5地割
18	大橋	敷布地	縄文土器・石器(晩 期)	横川目字大橋	53	新田I	敷布地	石鏃・土師器・須恵器	岩崎7地割
19	経川館	館跡	彌・土器・縄文土器 (中期)	横川目字経川 館	54	八天坂	敷布地	土師器・須恵器	岩崎8地割
20	瀧の森 古墳群	古墳群	古銭・人骨	横川目字瀧の 森	55	久田I	敷布地	土師器・須恵器	岩崎14地割
21	田中館	館跡	土師器・石器	山口字田中館	56	寺村	敷布地	縄文土器・土師器	岩崎14地割
22	八幡野I	敷布地	縄文土器	煤孫1地割	57	小寺	敷布地	土師器・須恵器	岩崎12地割
23	八幡野Ⅱ	敷布地	縄文土器・土師器・ 須恵器	山口40地割	58	小平	敷布地	縄文土器・土師器・ 須恵器	岩崎12地割
24	八幡館	敷布地 館跡	縄文土器・中世	山口40地割	59	里小原	敷布地	土師器・須恵器	岩崎32地割
25	月館	敷布地 館跡	彌・土器・磁器 縄文土器・石器	煤孫1地割	60	福森Ⅰ	敷布地	土師器・須恵器	藤根字福森
26	石曾根	集落跡	竪穴住居跡・縄文土 器(中・晩期)石器・ 弥生土器・土師器	煤孫2地割	61	福見館	敷布地	縄文土器・土師器・須 恵器・石匙・石鏃・石斧	藤根字福見
27	本郷	集落跡	竪穴住居跡・縄文土 器(中期)土師器・須 恵器	煤孫2地割	62	長沼古墳群	古墳群	鹿手刀・直刀・鉄鏃・ 勾玉・切子玉	長沼
28	笠原沢	敷布地	縄文土器(晩期)	煤孫2地割	63	高瀬田 古墳群	古墳群	土器・鹿手刀(鉄刀) 直刀(鉄刀)	長沼字高瀬田
29	林崎館	館跡	縄文土器・中世	煤孫3地割	64	念仏車	敷布地	縄文土器(前・中・後 期)・弥生土器・石鏃	長沼字高瀬田
30	中塚蔵	敷布地	土器・土師器	煤孫3地割	65	長清水Ⅰ	敷布地	縄文土器(前期末)・ 土師器	藤根字長清水
31	法皇野Ⅰ	敷布地	石鏃	煤孫4地割	66	蔵屋敷	集落跡	土器・弥生・土師器	江釣子村
32	法皇野Ⅱ	敷布地	縄文土器・石匙	煤孫4地割	67	下江釣 子羽場	集落跡	土器・土師器	江釣子村
33	栗井館	集落跡	縄文土器・石匙	煤孫5地割	68	新平	集落跡 駅家跡	縄文土器(前・中期)・ 弥生・土師器・土器・ 土師器・須恵器	江釣子村
34	観音館	館跡	土器・須恵器 土・土器	煤孫5地割	69	芦堂	集落跡	縄文土器・土師器・ 須恵器	江釣子村
35	上反町	敷布地	縄文土器(中～後期)	煤孫6地割	70	瀬上・中在野 里新遺跡群	敷布地 集落跡	土器・土師器・須恵器	北上市
36	兵庫館	敷布地	縄文土器・剥片石器	岩崎9地割	71	成澤	集落跡	土師器・須恵器	北上市
					72	大谷地	集落跡	縄文土器	北上市



第5図 周辺の遺跡位置図

Ⅲ 調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査区割の設定

月館跡と八幡館跡の道路公園の中心杭の2点をそれぞれ基準点とし、2点を通る直線を軸線としてグリットを設定した。

月館跡

調査区は道路建設予定地に沿った幅40m、長さ110mの東西に細長い区域である。基準点は道路公園の基準測量杭NO. STA78+60(基準点1)、STA78+00(基準点2)の2点間を見通す直線を基軸線とした。基準点の平面直角座標第X系による成果は下記の通りである。

基準点1 $X = -79,064.69735m$ $Y = +13,634.23880m$ $H = 125.350m$

基準点2 $X = -79,095.65262m$ $Y = +13,685.63433m$ $H = 125.200m$

グリットは基1を原点に東西、南北とも5m毎に区切り、調査範囲をカバーするように調査区の西端から東に向かって1~23、北から南にA~Kとし、グリット名はA1区・B2区等と呼称した。

八幡館跡

調査区は道路建設予定地の本線部分幅40m、長さ105m、農道部分に沿った部分幅1~5m、長さ28mの2区域である。基準点は道路公園の基準測量杭NO. STA80+100(基準点1)、STA79+20(基準点2)の2点間を見通す直線を基軸線とした。基準点の平面直角座標第X系による成果は下記の通りである。

基準点1 $X = -78,998.56332m$ $Y = +13,510.87637m$ $H = 127.070m$

基準点2 $X = -79,035.29764m$ $Y = +13,581.93787m$ $H = 126.184m$

グリットは基1を原点に東西、南北とも5m毎に区切り、調査範囲をカバーするように調査区の西端から東に向かって1~31、北から南にA~Sとし、グリット名はA1区・B2区等と呼称した。

(2) 掘り・精査

両遺跡とも土層の確認後に、遺物の出土しない地区は重機による表土除去を行ったが、遺物の出土する地区や、月館跡の堀跡は表土除去、掘り下げとも手掘りにより作業を行った。

検出した遺構の呼称は、両遺跡ともE27住居跡、B11陥し穴状遺構のように呼称し、同一グリット内で重複した場合は検出した順からF23土坑№1、№2等とした。

遺構の精査は住居跡は4分法、土坑は2分法によった。遺物は層位の確認をして各区画単位の中で、必要に応じて記録をとった後、取り上げた。

(3) 実測・写真撮影

平面実測は簡易遺り方測量法で行い、設定したグリッド毎に同一の座標系を用いた。すなわち、両遺跡とも基準点1をそれぞれ原点とする座標系を用いた。実際の実測にあたっては、平面図は1mメッシュを基本として行い、断面図は任意の高さで作成している。縮尺率は20分の1を原則とし、必要に応じて任意の縮尺とした。写真による記録は6×7版のモノクロ1台、35mm版のモノクロ、カラスライド各1台をセットで使用し、遺構の全景、埋土の断面、遺物の出土状況等を撮影した。

2. 室内整理

(1) 作業手順

遺構については、実測図の点検・合成、トレース、図版作成の順に作業を進めた。

遺物については、水洗と注記のほとんどを発掘現場で行い、室内整理では残った遺物の注記と接合・復元、仕分け・登録を順に進めた。その間、報告書掲載遺物の実測や拓本、写真撮影、計測、トレース、図版作成を併行した。

(2) 図版

本報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は月館跡、八幡館跡とも、60分の1を原則としたが、これに該当しないものは別にスケールを付した。

遺物実測図および土器拓影の縮尺は、それぞれ個々に縮尺率を付した。

遺物は各遺跡毎に遺構・遺物図版、写真図版を同一番号で統一した。

挿図や遺物の実測の表現方法は、凡例を右第6図に示した。

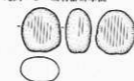
凡例-1 測整技法の表現



凡例-2 残存程度



凡例-3 硬石器断面面



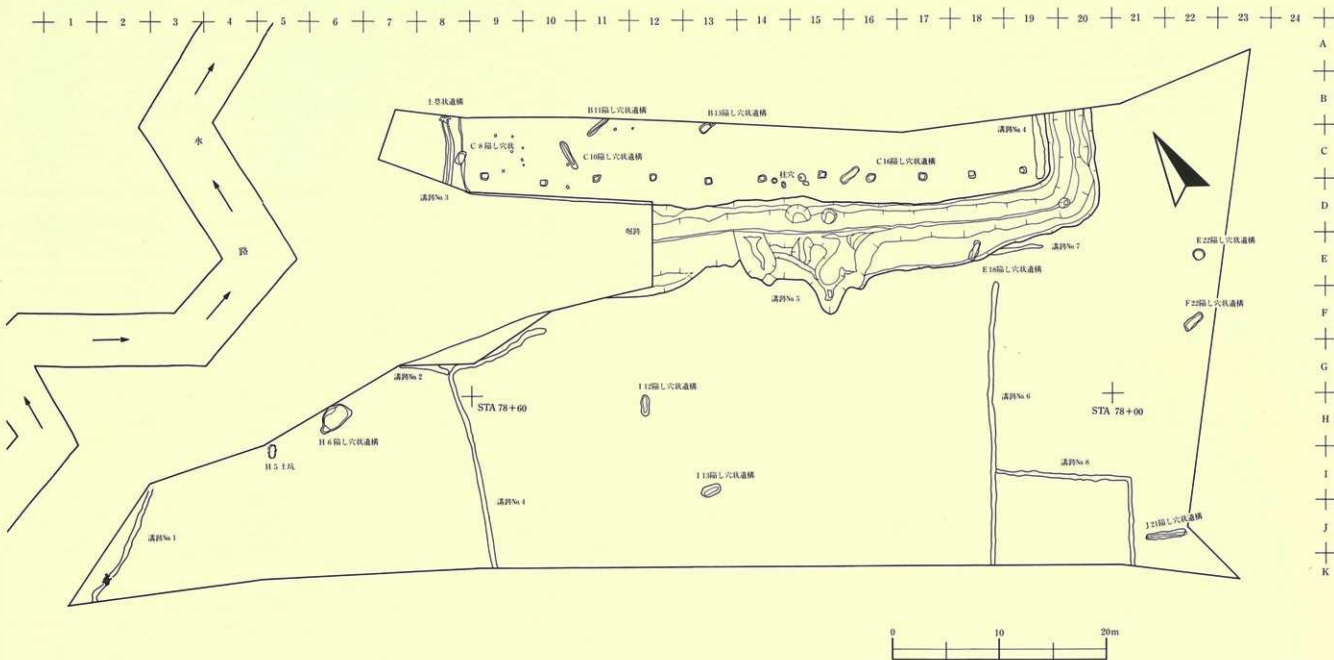
凡例-4



第6図 凡例

IV 月 館 跡

所 在 地 和賀郡和賀町煤孫1地割1-10ほか
委 託 者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成元年7月1日～10月7日
調査対象面積 3,590㎡
発掘調査面積 3,590㎡
遺跡番号・略号 ME63-1117・TD-89
調査担当者 中川重紀・鈴木貞行・女鹿文雄
協力機関 和賀町教育委員会



第1図 月館跡遺構配置図

1 検出された遺構と出土遺物

(1) 館跡に伴う遺構と遺物

和賀川下流に発達した河岸段丘には、前述の通り自然地形を利用した多くの館跡が確認されている。今回調査した月館跡はその一つで崖縁辺部に立地している。北側は段丘崖、西側は沢によって開析された地形を天然の堀とし、平坦面の南・東側に空堀をもつ、方形の館跡である。

調査範囲は堀と郭の一部分だけであり、堀跡1条、横列状柱穴1条、土塁状遺構1カ所、柱穴4個、柱穴状小土坑12個、溝跡2条が検出された。

① 堀跡（第3図、写真図版5・6）

堀跡は北端の段丘崖から直線的に南方に延び、約48m付近で湾曲しながら西へ方向を変え、西端は「だの沢」に続く。全長は約102m（南北約48m、東西約54m）であるが、調査範囲は南北方向約10m、東西方向約44mである。検出面の上部幅は6.7～4.3m、底部幅は0.1～0.8mである。断面の形状は葉研状であるが、東西方向の南側は雨水が原因と考えられる崩壊が多く、断面は船底状を呈する。郭側の法面上部には比高差10～20cmの段が見られる。同様の段は東西方向の南側法面上位から外側0.8～2.3mの位置にも見られ、ほぼ平坦な中場を形成している。深さは検出面より1.15～3.20mで西端部にいくほど深くなり、「だの沢」に続く。中央部での底面傾斜角は約25度である。

埋土は9～13層に細分される。黒褐色土が主体で壁側と下位には崩落土と見られる褐色土～黄褐色土が堆積している。

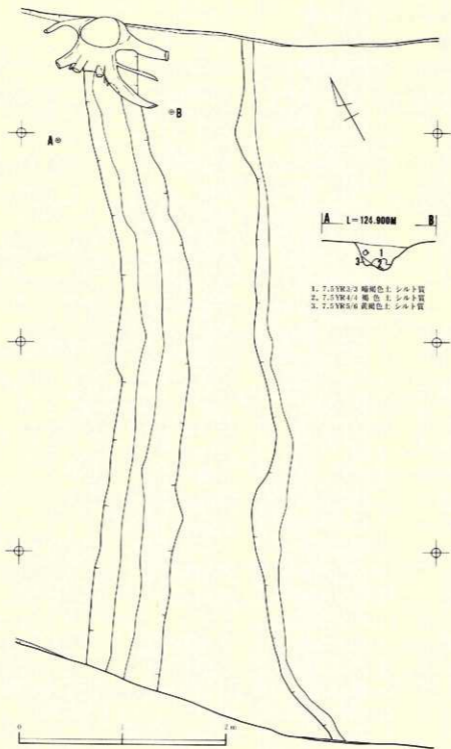
② 横列状柱穴（第4図、写真図版5）

東西方向の堀跡の法面上端から1.8～2.8m北側に位置し、堀跡にほぼ平行して直線的に11個の柱穴が配置されている。柱間は西から5.65m、5.05m、5.20m、5.25m、5.25m、5.20m、4.80m、4.85m、4.70m、4.80mである。

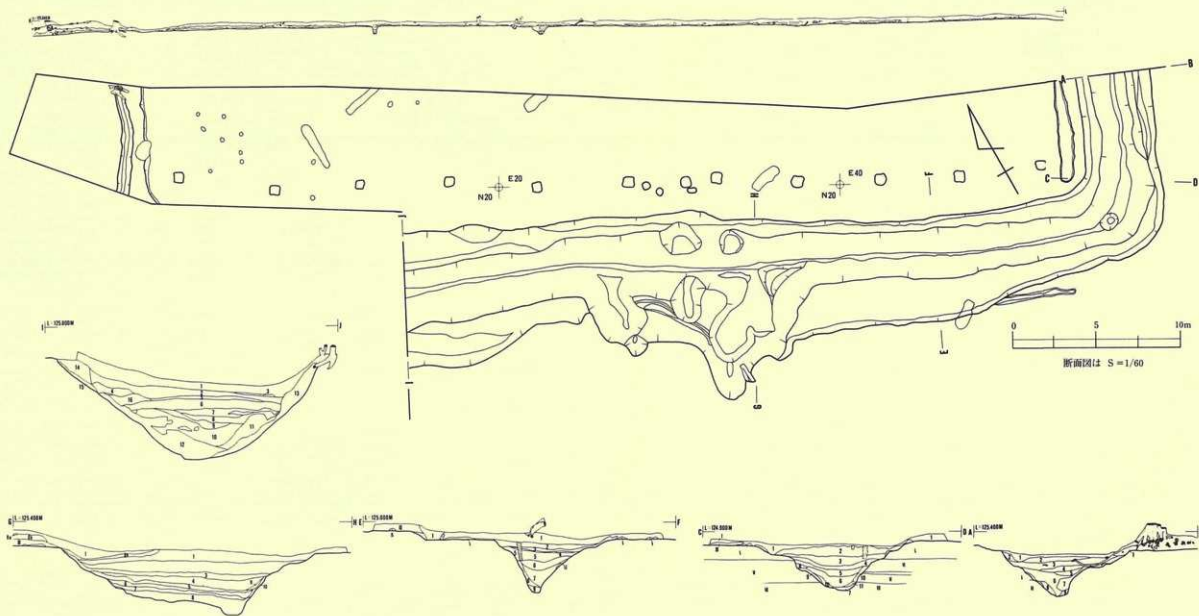
柱穴の平面形は方形を示し、掘り方は一辺50～64cm、深さは20～28cmである。柱痕は認められない。埋土は黒褐色土で一部褐色土の混入及び木根の攪乱がある。

③ 土塁状遺構（第2図、写真図版10）

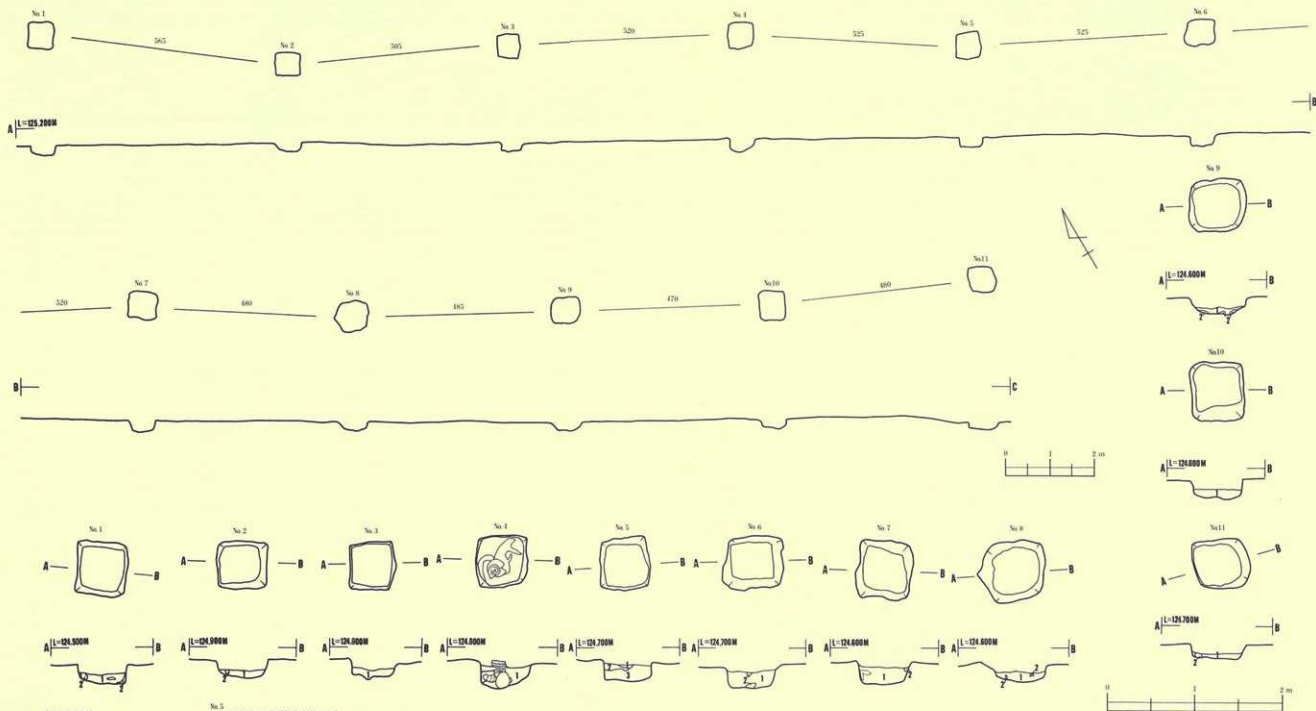
調査区北西端のB8区からC8区に位置し、郭の西側を画する崖に沿って検出された。規模は幅0.7～1.3m、高さ0.2～0.3mである。盛り土は認められず、地山を削り出した高まりであるため土塁の痕跡とははっきり断定できないが、調査区外北側の地表観察でもこれに続く高まりが認められるので遺構としたものである。



第2図 土壘状遺構・溝跡No.3



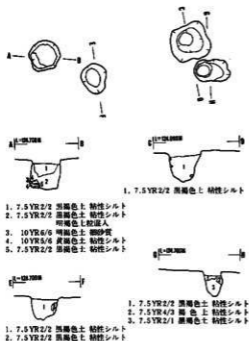
第3図 郭・堀跡・堀跡断面



No. 1 ~ 4, 6 ~ 11
 1. 7.5YR3.2 黒褐色土 粘性シルト
 2. 7.5YR3.6 明褐色土 粘性シルト

No. 5
 1. 7.5YR3.2 黒褐色土 粘性シルト
 2. 7.5YR2.2 黒褐色土 粘性シルト
 3. 7.5YR2.7 黒褐色土 粘性シルト

第4図 欄列状柱穴列



第5図 柱穴

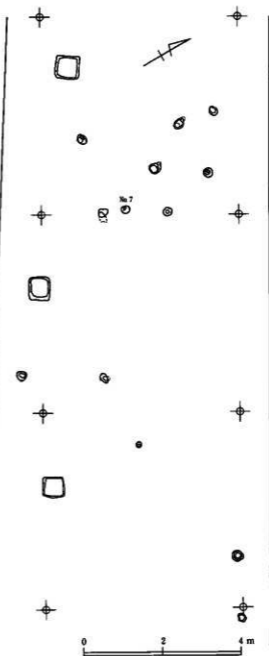
④ 柱穴（第5図、写真図版5）

調査区北側中央部のD14・15区に位置し、棚列状柱穴列の柱穴No.6とNo.7の中間で4個検出された。掘り方は径34～62cm、深さ38～46cmの規模をもち、平面形は楕円形か不整形である。埋土は黒褐色土が主体であり、柱痕跡は確認されなかった。

検出された位置が東西に延びる堀跡の中央部で、しかも対峙する配置であることから出入口施設に関わる遺構と考えられる。

⑤ 柱穴状小土坑（第6図）

調査区北西部の郭の西側に位置し、土壘状遺構から東側12mの範囲に12個分布している。平面形は円形ないし楕円形である。規模は径10～20cm台のもので、深さは20～34cmを測る。埋



第6図 柱穴状小土坑

土は黒褐色のシルトである。

遺物はNo.7の小土坑埋土から出土した角釘1点である。一辺0.7cmの方形状の頭部をもち、全長6cm、幅は0.4~0.8cm、先端部に向かってやや細くなり、くびれている。錆化によって変形しているが、折頭釘と推定される。

⑥ 溝跡

溝跡は9条検出されたが、この項では郭の西端と東端に位置し鉤跡に伴うと思われる2条について記載し、他の7条についてはその他の遺構で記述することにする。

溝跡No.3 (第2図、写真図版10)

調査区北西端のB8区~C8区にまたがって位置し、土塁状遺構の西端に沿って続き調査区外へ延びている。検出された長さは6.5m強で、やや湾曲しながら北方向に延びる。検出面の幅は50~70cm、底面の幅10~24cm、検出面からの深さは24~30cmである。横断面は逆台形である。

埋土は3層に細分される。上位から暗褐色土、褐色土、黄褐色土であり、全体に木根が多く含まれている。遺物は出土していない。

溝跡No.4

調査区東側のB19区~C19区にまたがって位置し、南北方向の堀跡に接するように直線的に走り、北側は調査区外へ伸びている。検出された長さは6mで、幅は37~100cm、底面の幅26~90cm、検出面からの深さは3.5~13.5cmと浅いものである。

埋土は褐色のシルトである。遺物は出土していない。

⑦ 遺構外の出土遺物

出土した中世の遺物は、柴付磁器の小片一点のみである。

陶磁器 (第8図、写真図版11)

柴付小皿の端反りする口縁部である。内外面に一条の細線が走り、外面には草花状の文様が見られる。やや薄い発色であり、光沢が弱い。



S=1/2

第7図
小土坑 No.7出土遺物



第8図 遺構外出土遺物(陶磁器)

(2) その他の遺構と出土遺物

館に伴わない遺構としては、陥し穴状遺跡11基、土坑2基、溝跡7条が検出されている。これらの遺構に伴う遺物は出土していない。

① 陥し穴状遺構

合計11基検出された陥し穴状遺構は、平面形から溝状3基、円形1基、楕円形4基、長方形3基に分けることができる。検出面はいずれも地山V層上面であり、4基の埋土から火山灰が検出されている。

B11陥し穴状遺構(第9図、写真図版7)

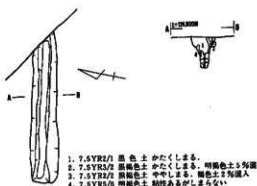
調査区北側郭上のB11区に位置し、一部調査区外にかかって検出された。検出面はV層上面である。平面形は開口部・底部ともに細長い溝状であり、短軸の断面形はY字状を呈する。長軸方向はN-82°-Eである。規模は開口部で222×40cm、底部で224×10cm、深さは中心部で50cmである。底面には若干凹凸があるが、枕跡はない。

埋土は4層に細分され、上位から黒色土、黒褐色土、明褐色土の順である。出土遺物はなく、時期は特定できない。

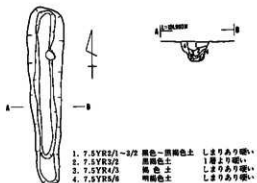
C10陥し穴状遺構(第10図、写真図版7)

調査区北西側郭上のC11区に位置し、B11陥し穴状遺構の東側4m付近で検出された。平面形は開口部・底部ともに溝状であり、短軸の断面形はU字状を呈する。長軸方向はN-5°-Eである。規模は開口部で282×50cm、底部で270×18cm、深さは中心部で32cmである。長軸方向の北端の立ち上がりには段がみられる。底面はほぼ平坦である。

埋土は4層に細分され、上位から黒色土、黒褐色土、褐色土、明褐色土であり、全体に硬い。出土遺物はなく、時期の特定はできない。



第9図 B11陥し穴状遺構



第10図 C10陥し穴状遺構

J21陥し穴状遺構 (第11図、写真図版7)

調査区南西端のJ21区に位置し、V層上面で検出された。平面形は開口部・底部ともに細長い溝状であり、短軸の断面形はU字状を呈する。長軸方向はN-67°-Wである。規模は開口350×62cm、底部で348×18cm、深さは中心部で116cmである。長軸両端の壁はオーバーハングしている。底面はほぼ平坦で枕跡はない。

埋土は8層に細分され、上位から黒色土、黒褐色土、黄褐色土、黒褐色土の順で、黄褐色土は壁の崩落土と考えられる。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

E22陥し穴状遺構 (第12図、写真図版8)

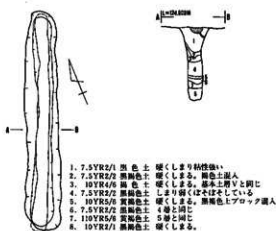
調査区西端のE22区に位置し、F22陥し穴状遺構の西6mの地点で検出された。検出面はV層上面で平面形が明瞭に確認された。平面形は開口部・底部ともに円形であり、断面形は箱型を呈する。規模は直径90cm、深さ150cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦で枕跡はない。

埋土は18層に細分されている。黒褐色土が上位から下位までの主体層で10・12層の褐色土は壁の崩落土と考えられる。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

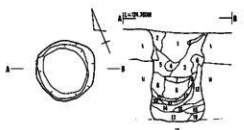
C8陥し穴状遺構 (第13図、写真図版8)

調査区北西端の郭内C8区に位置し、南北方向に走る土塁状遺構上で検出された。

平面形は開口部・底部ともに楕円形であり、短軸の断面形はU字状を呈する。長軸方向はN-55°-Eである。規模は開口部120×76cm、底部で80×49cm、深さは93cmである。底面に逆茂木痕と見られる4個の小柱穴が検出された。小柱穴の平面形は円形で、規模は直径6~10cm、深さ17cmを測る。



第11図 J21陥し穴状遺構



第12図 E22陥し穴状遺構

埋土は5層に細分される。1層の黒色土が上位から下位にかけて見られた。堆積状況から人為層と考えられる。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

H 6 陥し穴状遺構 (第14図、写真図版 8)

調査区の西側に位置し、H 5 土坑の東6mの地点で検出された。平面形は開口部

・底部ともに楕円形

であり、短軸の断面

形はU字状を呈す

る。長軸方向はN-

77°-Eである。規模

は開口部で250×176

cm、底部で234×118

cm、深さは中心部で

104cmである。西側

の上部は木根により

攪乱されている。底

面の中央部には逆茂

木痕が2個検出され

た。1個は東方向斜

めに44cmの深さに、

他の1個は西方向斜

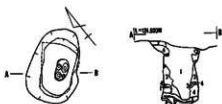
めに25cmの深さであ

る。

埋土は21層に細分される。上位から下位まで黒褐色土の自然堆積層が主体で、壁寄りの層はV層との混合が目立つ。また1層には火山灰が混入している。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

B13陥し穴状遺構 (第15図、写真図版 8)

調査区の北側郭上に位置し、B11陥し穴状遺構の東10mの地点で検出された。一部は調査区外にかかっている。平面形は開口



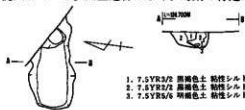
1. 7.5YR2/1 黒色土 しまりあり硬い。
2. 7.5YR2/2 黒褐色土 しまりあり硬い。
3. 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりあり硬い。
4. 7.5YR5/6 暗褐色土 しまりあり硬い。
5. 5YR5/8 明赤褐色土 粒状(1-2mm) 水酸化鉄を含む。

第13図 C 8 陥し穴状遺構



1. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性なく軟らかい。炭化物微量を含む。
2. 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性なく軟らかい。炭化物微量を含む。
3. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性なくやや硬い。炭化物微量を含む。
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なく軟らかい。炭化物微量を含む。
5. 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性なく軟らかい。炭化物微量を含む。
6. 7.5YR3/2 暗褐色土 粘性なく軟らかい。炭化物微量を含む。
7. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なく軟らかい。炭化物微量を含む。
8. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なく軟らかい。炭化物微量を含む。粒子が粗くザラザラしている。
9. 7.5YR2/3 暗褐色土 粘性なく軟らかい。
10. 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性なく軟らかい。黄褐色土混入。
11. 10YR4/6 褐色土 粘性なく軟らかい。V層アロックス状混入。
12. 10YR5/6 黄褐色土 粘性なく硬い。
13. 17:10と同じ 14:8と同じ 15:12と同じ 16:10:8と同じ
19. 10YR2/3 暗褐色土 粘性なく硬い。V層との混合土。
20. 19と同じ
21. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なく軟らかい。

第14図 H 6 陥し穴状遺構



1. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性シルト。
2. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性シルト。
3. 7.5YR5/6 暗褐色土 粘性シルト。

第15図 B13陥し穴状遺構

部・底部ともに楕円形であり、短軸の断面形は浅いU字状を呈する。長軸方向はN-81°-Eである。規模は開口部124×70cm、底部で118×48cm、深さは24cmである。北東部の壁は調査区外のため未検出である。この壁際の底部には、直径22cmの円形の窪みがある。

埋土は3層に細分される。1・2層が黒褐色土で木根が多く、3層が明褐色土である。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

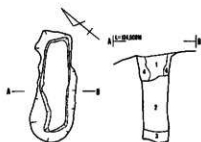
E18陥し穴状遺構 (第16図、写真図版9)

調査区西側中央部のE18区に位置し、東西方向の掘跡南側、法面上で検出された。平面形は開口部・底部ともに長方形であり、短軸の断面形は長方形を呈する。長軸方向はN-55°-Eである。規模は開口部176×62cm、底部で144×40cm、深さは139cmである。側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており、開口部付近でやや外反している。底面は平坦である。

埋土は4層に細分される。上位から中位が黒褐色土で、下位は砂土が混じった暗褐色土である。人為的な堆積状況を示す。1層上部には火山灰がブロック状に含まれている。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

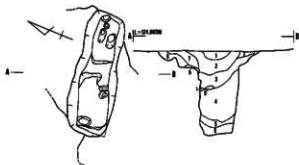
F22陥し穴状遺構 (第17図、写真図版9)

調査区東端のF22区に位置し、E22陥し穴状遺構の南方6mで検出された。上部は攪乱をうけている。平面形は開口部・底部ともに長方形であり、短軸の断面形はU字状を呈する。長軸方向はN-80°-Eである。規模は開口部196×68cm、底部で174×44cm、深さは中心部で132cmである。側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており、開口部付近でやや外反している。底面は中央部分が少し盛り上がって



1. 7.5YR3/2 黒褐色土 上部に火山灰混入。炭化物含む。
2. 7.5YR2/2 黒褐色土 軟らかい。砂質黄褐色土混入。
3. 10YR3/4 暗褐色土 軟らかい。砂質黄褐色土混入。

第16図 E18陥し穴状遺構



1. 7.5YR2/3 黒褐色土 しまり臭。炭化物混入。上部に火山灰。
2. 7.5YR2/3 暗褐色土 しまりや弱い。炭化物混入。
3. 2層と同じ しまり弱い。褐色土25%混入。
4. 7.5YR2/2 黒褐色土 しまり弱い。黄褐色土(砂質)混入。
5. 7.5YR2/1 褐色土 しまり弱い。黄褐色土(砂質)混入。
6. 10YR4/4 暗褐色土 砂質土。しまり臭。
7. 7.5YR2/2 黒褐色土 しまり臭。褐色土粒混入。
8. 10YR2/3 暗褐色土 しまり臭。褐色土25%混入。

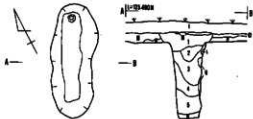
第17図 F22陥し穴状遺構

いる。7個の窪みが検出されたが、東壁よりの2個は逆茂木痕と思われるが、他は明らかでない。

埋土は9層に細分される。上位から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土の順で下位の5層に黒色土が堆積している。また1層には火山灰の混入が認められた。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

H12陥し穴状遺構 (第18図、写真図版9)

調査区南側中央のH12区に位置し、I13陥し穴状遺構の北側10mで検出された。検出面はV層上面である。平面形は開口部が楕円形で、底部が長方形である。短軸の断面形はU字状を呈する。長軸方向はN-29°-Eである。規模は開口部が178×62cm、底部で137×31cm、深さは中心部で136cmである。側壁は底面からはほぼ垂直に立ち上がっており、開口部付近でやや外反している。底面は平坦であるが、長軸方向北側の壁で逆茂木痕1個が検出された。



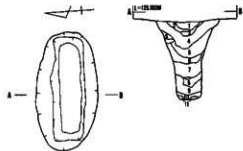
1. 7.5YR2/2 黒褐色土 暗褐色土ブロック混入 本様多い
2. 7.5YR2/2 黒褐色土 炭化物混入
3. 7.5YR2/2 黒褐色土 火山灰混入
4. 7.5YR2/2 黒褐色土 黄褐色砂質土混入
5. 7.5YR2/1 黒褐色土 軟らかい
6. 7.5YR2/2 黒褐色土 軟らかい 褐色土ブロック混入
7. 10YR3/4 黒褐色土 黄褐色砂質土混入

第18図 H12陥し穴状遺構

埋土は6層に細分される。上位から下位まで黒褐色土で、1層には火山灰が、3層には褐色土が混入している。土層観察用ベルトにかけて検出されたため、Ⅲ層からの掘り込みが確認された。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

I13陥し穴状遺構 (第19図、写真図版9)

調査区南側のI13区に位置し、H12陥し穴状遺構の10m南側で検出された。検出面はV層で上面である。平面形は開口部が楕円形で、底部が長方形である。短軸の断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-88°-Wである。規模は開口部186×98cm、底部で94×35cm、深さは中心部で123cmである。短軸の両壁は底面から中位まではほぼ垂直に立ち上がるが、開口部に向けては大きく外反している。底面は平坦であり、杭跡は見られない。



1. 7.5YR2/2 黒褐色土 シルト質 細かな木屑多い
2. 10YR2/6 黒褐色土 シルト質 褐色土ブロックあり
3. 10YR2/6 黄褐色土 砂質 火山灰
4. 10YR2/3 黄褐色土 シルト質 炭化物含む
5. 7.5YR2/1 黒褐色土 シルト質 褐色土砂粒に混入
6. 10YR2/3 暗褐色土 シルト質 炭屑軟らかい
7. 10YR2/3 黒褐色土 シルト質 粘りあり 褐色土粒混入
8. 7.5YR2/1 黒褐色土 シルト質 粘りあり 軟らかい
9. 10YR2/6 黄褐色土 粘土質 しまり均一
10. 10YR2/6 黄褐色土 粘土質 褐色土混入

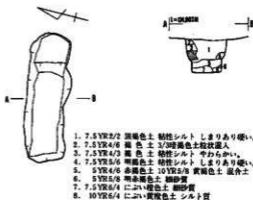
第19図 I13陥し穴状遺構

埋土は11層に細分される。上位から黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土

の順である。2・3層には火山灰が検出された。埋土状況から自然堆積と思われる。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

C16陥し穴状遺構 (第20図)

調査区北東側のC11区に位置し、堀跡に沿って配置されている横列状穴№7と№8の中間で検出された。検出面はV層上面である。平面形は開口部・底部ともに長方形であり、短軸の断面形は箱型を呈する。長軸方向はN-80°-Eである。規模は開口部192×60cm、底部で180×42cm、深さは中心部で49cmである。底面はほぼ平坦であるが、長軸方向の東側に比高差25cmの段をもっている。



1. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性シルト しまりあり硬い。
2. 7.5YR4/6 褐色土 3/3時褐色土粒状混入。
3. 7.5YR4/3 褐色土 粘性シルト 中わらかい。
4. 7.5YR5/6 暗褐色土 粘性シルト しまりあり硬い。
5. 5YR4/6 赤褐色土 10YR5/8 黄褐色土 炭灰土
6. 5YR5/8 暗赤褐色土 細砂質
7. 7.5YR6/4 におい橙褐色土 細砂質
8. 10YR6/4 におい黄褐色土 シルト質

第20図 C16陥し穴状遺構

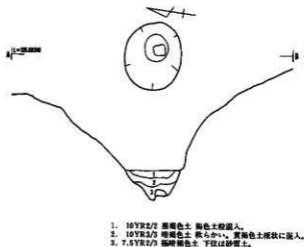
埋土は8層に細分される。上位から黒褐色土、褐色土、におい橙褐色土の順である。上位から中位にかけて木根が多く、壁側では攪乱されている。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

② 土坑

2基検出された土坑は共に平面形が楕円形であり、形状から陥し穴状遺構の可能性も考えられる。

D20土坑 (第21図、写真図版10)

調査区北東側のD20区に位置し、堀跡湾曲部分の底部精査中に検出された。上部は堀によって削平されている。平面形は開口部・底部ともに楕円形であり、短軸の断面形はU字状を呈し、長軸方向はN-85°-Eである。規模は開口部が110×90cm、底部で43×36cm、深さは中心部で47cmである。底面に段があり、その上に径18cm大の石が検出された。



1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土粒混入。
2. 10YR3/3 暗褐色土 軟らかい。黄褐色土粒状に混入。
3. 7.5YR2/3 暗赤褐色土 下位は砂質土。

第21図 D20土坑

埋土は3層に細分される。上

位から、褐色土、暗褐色土、極暗褐色土の順である。堀跡によって切られているので、館構築以前の遺構である。

H5土坑（第22図、写真図版10）

調査区西端のH5区に位置し、H6陥し穴状遺構の西側6mの地点で検出された。平面形は開口部・底部ともに楕円形であり、短軸の断面形はプラスチック状を呈する。長軸方向はN-33°-Eである。規模は開口部120×55cm、底部で119×71cm、深さは中心部で85cmである。底面は平坦でVI層に達している。

埋土は13層に細分される。黒褐色土が主体で中位から下位にかけての両壁面に崩落したと考えられる黄褐色土がみられる。自然堆積による埋没と考えられる。

③ 溝跡（写真図版10）

溝跡は9条（№1～9）が散在して分布している。これらの内、№3・№9については郭上に位置していることから館に伴う溝と考えられ、館跡に伴う遺構の項に記載している。

検出された溝跡の規模は長さ4～29cm、幅20～50cm、深さ12～20cmで調査範囲外へ延びているものが、ほとんどである。横断面はU字状である。埋土状況、掘り込み面等から考えて地目境、地籍境の可能性が高い。

④ 遺構外の出土遺物

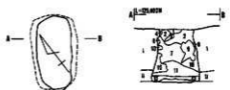
遺構外の出土遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、土製品等である。これら遺物の量は非常に少なく、土器は浅いコンテナ1箱、石器12点、泥人形1点である。ここには堀跡の埋土から出土した土器、石器も含めてある。

■ 土器

縄文時代の土器（第23・24図、写真図版11）

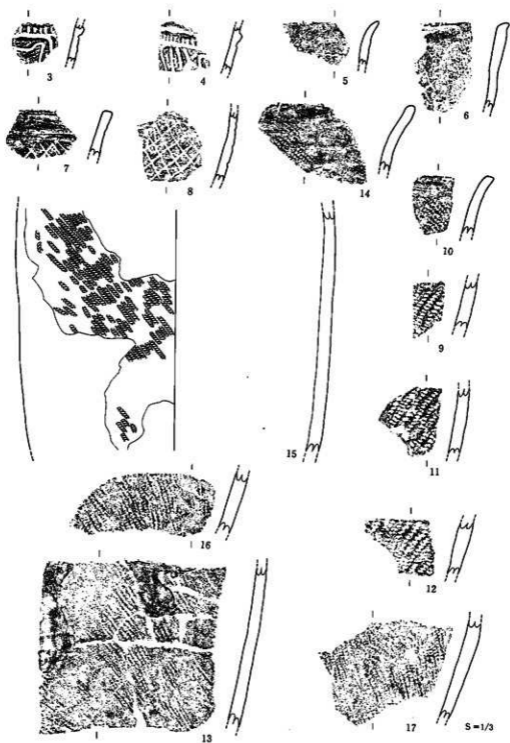
縄文土器は主に調査区西端部からの出土であった。点数が少なくその大半が接合不可能の小片である。そのため、分類は行わず個々について記載する。

13～17は同一個体で粗製深鉢の破片である。全体にLR単節斜縄文を施文している。9～12も粗製深鉢の体部破片で、施文は9・11・12がRL単節斜縄文、10がLR単節斜縄文である。これらはいずれも中期に属すると思われる。6～8は網目状撚糸文の施文がある鉢の破片で、6・7が口縁部、8が体部である。3・4は頸部の破片で貼付した粘土紐に、縦に刻みが付け



1. 7.5YR5/1 黒色土 非常に軟らかい
2. 7.5YR3/1 黒褐色土 軟らかい、炭化物混入
3. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性なくかたい
4. 10YR5/6 黄褐色土 粘性なく軟らかい
5. 7.5YR2/1 黒褐色土 粘性なく軟らかい、Ⅴ・Ⅵ層粗砂
6. 4層と同じ
7. 10YR2/1 黒色土 3層混入、炭化物微量含む
8. 4層と同じ
9. 10YR2/2 黒褐色土 ややかたい、7層若干混入
10. 4層と同じ
11. 10YR2/1 黒色土 軟らかい、炭化物微量混入
12. 10YR2/3 暗褐色土 かたい、砂粒・Ⅴ層混入
13. 10YR2/3 暗褐色土

第22図 H5土坑

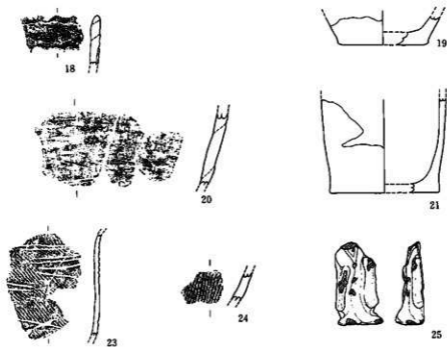


第23圖 遺構外出土遺物(土器 1)

られ、その下に沈線が施文されている。器種や文様構成は不明であるが、大木6式に対応する土器と思われる。5は鉢の口縁部、19・21は底部、20は体部でいずれも無文の土器である。22(写真図版11)は壺の体部と思われるが、磨耗が著しく器種は特定できない。

弥生時代の土器 (第24図、写真図版11)

弥生時代の土器は破片が4点、同一グリットE22区から出土した。23・24は出土状況や胎土ら同一個体と考えられる。縦位の単節斜縄文が施された後、沈線による変形工字文が施されている。小破片のため器種や文様構成は不明である。



S=1/3

第24図 遺構外出土遺物(土器2・土製品)

b 石器 (第25図、写真図版12)

遺構外から出土した石器は、石匙、篋状石器、搔器、不定形石器、礫器、石核、磨石、砥石である。

石匙

1は縦型石匙で、裏面から表面への押圧剥離で刃部を作り出している。凸辺状をなす一方の側面裏面に第一次剥離面を残す。バルブの部分は両面剥離でつまみを作り出し、先端部は逆三角形形状に器形を整えている。

篋状石器

2は表面の一部に自然面を残し、縁辺部に調整剥離をいれ篋状に仕上げている。土掘り具と思われる。3は頭部側面からの調整剥離痕が表裏両面に見られる。

搔器

4は1側面の片面から調整痕が見られる。5は1側面部に片面からの剥離によって刃部を作り出している。

不定形石器

6・7は1側面に微細の剥離痕が見られる剥片である。8は先端部と側面の一部に剥離痕を有する。

礫器

9は片面に自然面を残し、刃部と思われる側面の両面に剥離調整が施されている。

石核

10は上下左右からの剥離によって、多くの剥離痕を残す。自然面は見られない。

磨石

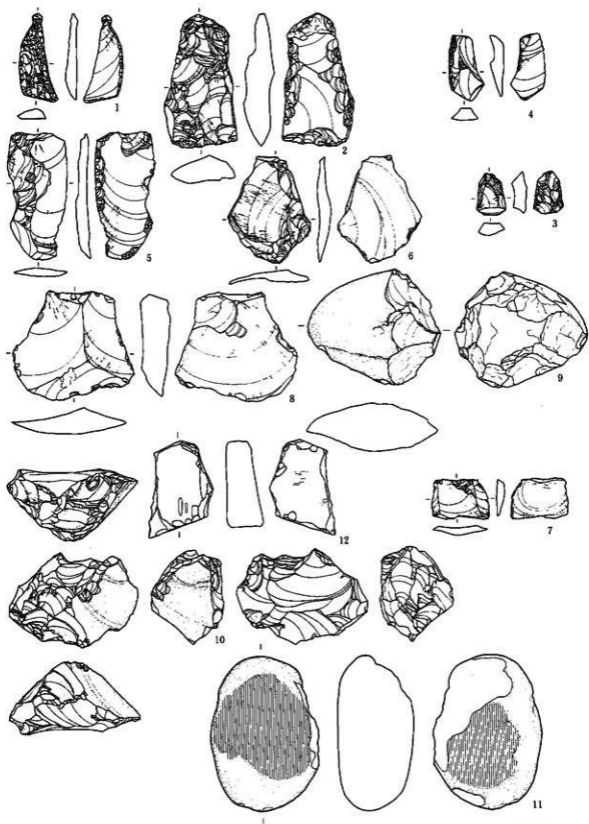
11は拳大の大きさで、表裏両面に使用痕をもつ。敲打痕は見られない。一部火熱を受けた痕跡がある。

砥石

12は表裏2面と1側面が使用されている。このうち1面は中央部がやや湾曲している。破損品であり、形状は不明である。

c 土製品 (第24図、写真図版11)

泥人形1点がJ8区のI層より出土している。大きさは高さ6.5cm、幅3.1cm、厚さは底部で2.3cm、中央部で1.7cmである。頭部は破損している。磨耗が著しく原形は、はっきりしない。



第25圖 遼南外出土遺物（石器）

S=1/3

石器一覽表

登録 番号	器 種	出土地点	法 量				石 質	産 地	掲載 番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
1	石 匙	H13区	7.1	3.2	0.9	13	硬質泥岩	奥羽山地	1
2	鹿状石器	D18区	10.6	5.8	2.5	150	硬質泥岩	奥羽山地	2
3	鹿状石器	J6区	3.3	2.3	1.0	9	硬質泥岩	奥羽山地	3
4	掻 器	E16区	5.3	2.8	1.1	11	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地	4
5	掻 器	K22区	10.1	4.8	0.9	47	硬質泥岩	奥羽山地	5
6	不定型石器	I3区	8.5	6.6	1.6	46	珧質泥岩	奥羽山地	6
7	不定型石器	J5区	3.3	4.5	0.6	11	硬質泥岩	奥羽山地	7
8	不定型石器	E17区	8.7	9.8	2.2	150	硬質泥岩	奥羽山地	8
9	磨 器	B8区	9.3	10.6	4.1	360	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地	9
10	石 槌	E13区	7.6	10.4	5.8	350	硬質泥岩	奥羽山地	10
11	磨 石	J3区	12.4	8.7	6.0	680	輝石安山岩	奥羽山地	11
12	砥 石	D17区	7.7	5.2	2.9	130	流紋岩	奥羽山地	12

2. まとめ

今回の調査によって館跡から堀跡、横列柱状穴列等が確認され、月館跡の一部が明らかになった。以下調査によって得られた内容に若干の考察を加え、まとめとする。

(1) 館跡について

堀によって画された郭の上面は横列、陥し穴状遺構の検出状況から館構築時にはもっと高い位置であり、後世の耕作造成により、かなりの削平を受けていると考えられる。東西に延びる堀跡の中央部で検出された4個の柱穴は、出入口施設に係る遺構と考えられるため、土橋を想定し堀の精査を行ったが埋土に変化は見られなかった。

現段階では堀跡等の様相から「単郭型城館」と考えられるが、現在は土取りのために削平された東側に土塁が存在していたらしく、このことから単に単郭型にしてよいのか疑問の余地がある。

月館跡に関する文献資料が皆無であり、嘉永年間と安政年間の絵図に「榎館」の小字名が載っているだけである。したがって調査によって検出された遺構や地形から館としての機能を果たしていたことは確認されたが、構築年代は決定できない。当地は鎌倉時代より和賀氏の支配下であったことは明確であり本館跡も和賀氏と関連する中世の支館と推測される。

(2) 館跡以外の遺構について

陥し穴状遺構は平面の形状から、溝状3基、円形1基、楕円形4基、長方形3基のタイプに分けられる。これらのうち、遺茂木痕が認められたのは4基である。分布や配列に規則性は見られない。構築時期については、伴出遺物、他遺構との切り合い等が見られず、決定づけることができない。しかし、3基の埋土上層部に十和田系降下火山灰が検出されていることから、

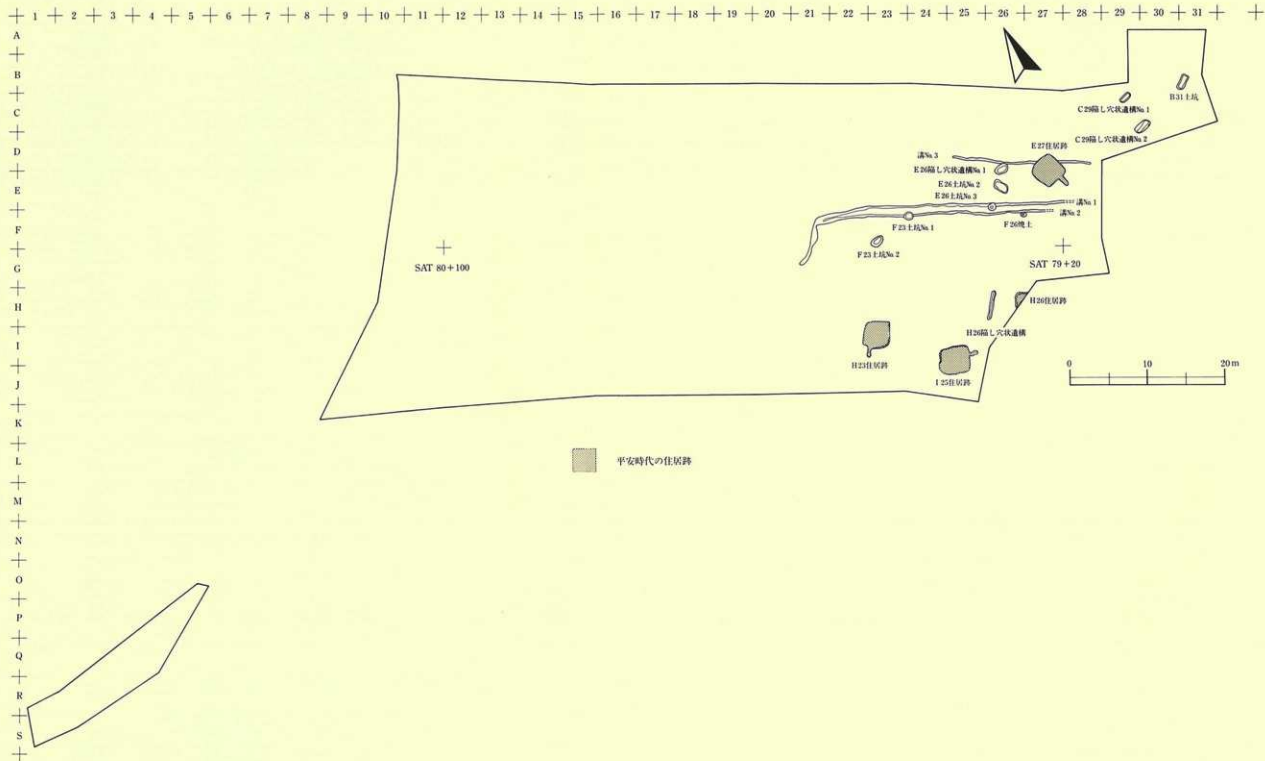
弥生～平安前期と考えられるが周辺部から縄文中期の土器片が出土しており、時期の下限は縄文中期まで下がることも考えられる。検出された数と形態の種類から、これらは同時期のものではなく、長年に渡り比較的小規模の狩りが行われていたことが推測される。

<参考文献>

- | | | |
|------------|--------|---|
| 岩手県和賀町 | (1977) | 【和賀町史】 |
| 岩手県立博物館 | (1982) | 【岩手の土器】 |
| 和賀町教育委員会 | (1983) | 【経川館遺跡】岩手県和賀町文化財報告書57年度第2集 |
| 岩手県教育委員会 | (1986) | 【岩手の城館跡】岩手県文化財調査報告書第82集 |
| 田村壮一 | (1987) | 【陥し穴状遺構の形態と時期について】『紀要』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 岩手県文化振興事業団 | (1988) | 【佐間館跡発掘調査報告書】岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集 |
| 和賀町教育委員会 | (1989) | 【和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅰ】和賀町文化財報告書第18集 |
| 和賀町教育委員会 | (1989) | 【和賀町和賀川南地区絵図帳】和賀町文化財報告書第22集 |
| 岩手県文化振興事業団 | (1990) | 【岩崎城西遺跡発掘調査報告書】岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集 |

V 八幡館跡

所在地 和賀郡和賀町山口46地割67-16ほか
委託者 日本道路公園仙台建設局
発掘調査機関 平成元年4月10日～7月31日
調査対象面積 3,820㎡
発掘調査面積 3,820㎡
遺跡番号・略号 NE63-0194・HMD-89
調査担当者 中川重紀・鈴木貞行・女鹿文雄
協力機関 和賀町教育委員会



第1図 八幡館跡遺構配置図

1. 検出された遺構と出土遺物

八幡館の調査区は、段丘面上の北縁から約70m中に入った部分であり、東側は「だの沢」、西側は農道に区切られている部分である。確認された遺構は住居跡4棟、土坑5基、陥し穴4基、焼土跡1カ所、溝3条である。これら遺構の検出状況は、調査区の中程から東側部分に検出されている。遺物は土器、石器等が出土しているが、遺構と同様に東側に多く、西側では僅かに出土する程度である。

(1) 住居跡

遺構の検出面は黒褐色土層中であり、平面形など判別出来ないものが大半である。何れも平安時代の住居跡で、調査区東側の「だの沢」に沿った地区に約5～10m間隔で分布している。4棟の内1棟は「だの沢」によって、半分以上が削られている。竈は3棟の内1棟が南西、2棟が南東方向にある。

E27住居跡（第2～4図・写真図版2、7）

遺構

本住居跡はⅠ、Ⅱ層を剥いだ段階で礎群が検出され、石も焼けていないことから、配石として精査を開始した遺構で、精査が進行してゆく中で土器や焼土の存在から住居跡と確認出来た。黒褐色土層中であることから壁を明瞭に捉えることが出来ないが、床面が褐色土を僅かに掘り窪めていたものから、おおよその平面形態、規模が確認できた。

<平面形・規模> 検出された状況から方形状を呈していたと考えられる。規模は南北下端で3.26m、東西下端で3.39mである。

<埋土> 6層に細分される。黒褐色土～褐色土で、全体に木根による攪乱が見られる。1層は基本土層Ⅱ層、2～6層は炭化物粒、焼土粒、土器片を含む土層で、各層とも柔らかい。

<壁> 立ち上がりは全体的に不明瞭であるが、下位の基本土層Ⅴ層を掘り込んであるものから推定すると、床面から外傾して検出面に至るようである。壁高は検出面から35cmである。

<床面> Ⅴ層面を僅かに掘り込んでいる。全体的に木根による攪乱が見られるが、ほぼ平坦であり、竈付近では比較的固く締まっている。

<土坑> 2基検出された。土坑1は竈の東脇に検出された。平面形は円形状で、規模は60×50cm、深さは最も深いところで18cmである。埋土は住居の埋土が主であり、下位には灰らしきものが極僅かに見られていた。土坑2は住居の西隣付近にあり、平面形は楕円形で、規模は90×60cm、深さ12cmで浅い窪みとなっている。埋土は黒褐色土に小礫が混じったものである。土坑1は住居使用時期には開いていたと考えられ、土坑2は埋まっていたと考えられる。

<柱穴> 検出されなかった。

<竈> 南東壁の東寄りに位置する。焚き口部から煙出し部までの総長1.89mで、煙道部分は

1.20mである。煙道の長軸方向はE-70°-Sである。竈部分は幾らか押し潰された状態にあり、原形を保っている状態とは言い難いものである。残されているものから類推すると両袖部分に30cm大の長方形の石と扁平な石7個を使用してシルトの上に構築している。天井部には50cm大の長方形の石を使用している。石材の石質は花崗閃緑岩等である。また、これらの石は天井部に使用してしるものは焼けて赤変している。袖部に使用している石は強く焼けている状態ではないことから、石の周辺はシルト等で覆われていたと考えられる。支脚は小型の壺(第3図12)を竈の中央部から右袖部分の近くに倒立させて置いている。また、竈埋土中の2層には壺の破片(第3図15)が入っており、天井部の補強として使われたようである。燃烧部は幅26cmあり、焼土は強く焼けた状態ではないが、20cm×20cmの範囲に見られ浅い窪み状となっている。煙道は幅30cmで掘り込まれ、壁の両側を30cm大の扁平な石で組み、天井部分にも一部抜けているが同様な石で覆っている。これらの石には強く焼けた痕跡はない。底面は住居壁部分から煙出し部分まではほぼ平坦で煙出し部分で直立している。煙出し部分の形状は方形状と思われる。

時期は出土遺物から平安時代である。

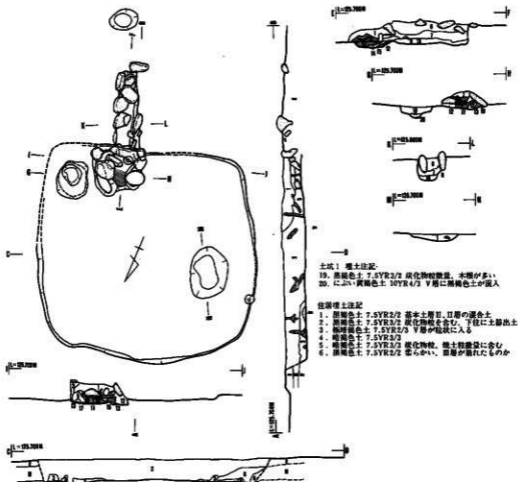
遺物(第3、4図・写真図版7)

遺物は土師器、土製品、鉄製品である。出土状況は12、15が竈内、8が煙道内、他は住居の埋土中から床面にかけて出土している。

1はロクロ使用の土師器で高台部が取れた高台付き坏で内面黒色処理を施していないものである。底部の切り離し技法は高台部を取り付け後ナデしているため不明である。器形は体部がやや膨らみを持って口縁部に至り、口縁はやや丸みを帯びている。器面調整は内外面ともロクロナデ痕である。

2～7はロクロ使用の土師器坏で内面黒色処理を施しているものである。底部の切り離し技法は2、4、7の底部で見ると回転糸切りである。器形は2～6を見ると体部がやや膨らみを持ちながら口縁部に至るもので、口縁はやや丸みを帯びている。器面調整は内外面ともロクロナデ痕だけである。

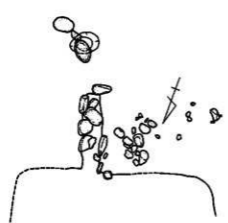
8～10はロクロ使用の土師器坏で内面黒色処理を施しているものである。8は内面の黒色処理は一部残るのみで他は消失している。底部は欠けていることや摩耗していることから切り離し技法は不明である。器形は体部が若干膨らみながら口縁部に至り、口縁部は若干外傾している。器面調整は外面ロクロナデ、内面ロクロナデ後にヘラミガキである。9は底部の切り離し技法が回転糸切りである。器形は体部がやや膨らみを持ちながら口縁部に至り、口縁部は若干外傾している。器面調整は外面ロクロナデ、内面はロクロナデ後にヘラミガキを施している。10は口縁部から体部にかけての破片である。器形は体部がやや膨らみを持ちながら口縁部に至



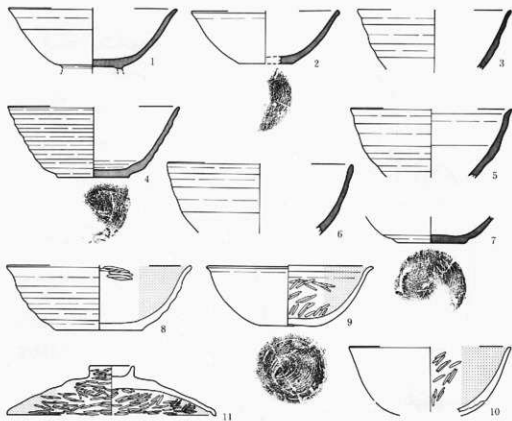
土坑1 埋土注記
 19. 黒褐色土 7.5YR2/3 炭化物粒数多、木屑が多い
 20. 上記、黄褐色土 10YR4/3 V層に黒褐色土の混入

住居埋土注記
 1. 黒褐色土 7.5YR2/2 基本土層II、IV層の混合土
 2. 黒褐色土 7.5YR2/3 炭化物粒を含む、下段に土器出土
 3. 黄褐色土 7.5YR2/3 V層が陥没に入る
 4. 黄褐色土 7.5YR3/3
 5. 黒褐色土 7.5YR2/2 炭化物粒、焼土粒数多を含む
 6. 黒褐色土 7.5YR2/2 炭化物、木屑が混入したものか

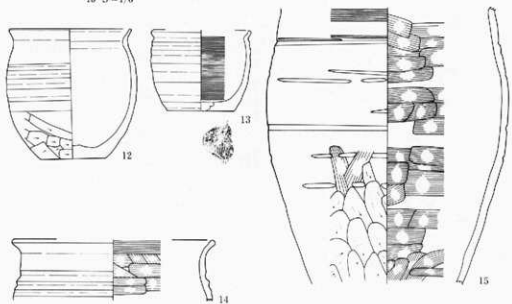
埋土注記
 1. 黄褐色土-黒褐色土 7.5YR2/3-2 焼土粒、炭化物粒を僅かに含む
 2. 黄褐色土 7.5YR3/3 焼土、炭化物粒を僅かに含む
 3. 黒褐色土 7.5YR2/2 中程度に締まっている
 4. 黄褐色土 7.5YR2/2 焼土粒、炭化物粒数多に入る
 5. 黄褐色土 10YR2/4 炭化物粒、焼土粒僅かに入る、袖部の陥没土か
 6. 黒褐色土 7.5YR2/2 炭化物粒数多に入る
 7. 黒褐色土 7.5YR2/2 焼土粒、炭化物粒数多に入る
 8. 黄褐色土 10YR2/3-7.5YR2/3 基本土層IV層
 9. 基本土層IV層に相当する
 10. 黄褐色土 7.5YR3/3 遺物部分、空く締まっている
 11. 上記、黄褐色土 8YR4/3 埋土
 12. 黄褐色土 7.5YR3/4 焼土、炭化物粒少量
 13. 黄褐色土-黄褐色土 7.5YR4/4-3/6 一部分のみに赤変している
 14. 黄褐色土 10YR4/4 基本土層IV層が炭化している、比較的強い
 15. 黄褐色土 10YR3/3 焼土、炭化物粒数多を含む
 16. 黒褐色土 7.5YR2/2 炭化物粒数多に入る
 17. 黄褐色土 7.5YR2/3 炭化物粒数多に入る
 18. 黄褐色土 7.5YR2/2 基本土層V、Vがアロックで混入する



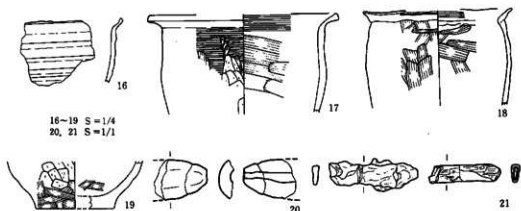
第2図 E27住居跡



1-11 S=1/3
 12-14 S=1/4
 15 S=1/6



第3圖 E27住居跡出土遺物1



第4図 E27住居跡出土遺物2

土器観察表

No	図版番号	写真番号	種類	器種	法量(測定値)			外面調整			内面調整			成形	取り直し	その他
					口縁径cm	底径cm	器高cm	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部			
1	3-1	7-1	土師器	高台付杯	(13.9)	4.9	4.8	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	
2	3-2	7-2	土師器	杯	(12)	(4.4)	4.2	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	
3	3-3	7-3	土師器	杯	(12.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	
4	3-4	7-4	土師器	杯	(13.6)	5.8	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	
5	3-5	7-5	土師器	杯	(12)	-	5.6	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	
6	3-6	7-6	土師器	杯	(15)	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	
7	3-7	7-7	土師器	杯	-	5.5	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	
8	3-8	7-8	土師器	杯	14.8	7	-	-	-	-	ミガキ	-	-	ロクロ	-	
9	3-9	7-9	土師器	杯	13.4	4.7	5.2	-	-	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	糸切り	
10	3-10	7-10	土師器	杯	(13)	-	4.9	-	-	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	-	
11	3-11	7-11	土師器	甕	(16.8)	(横み量) 3.6	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	-	-	
12	3-12	7-12	土師器	甕	12	6.8	4	-	-	ケズリ	-	-	-	ロクロ	-	
13	3-13	7-13	土師器	甕	(10.6)	(7)	13.9	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ	糸切り	
14	3-14	7-14	土師器	甕	(21)	-	6.6	-	-	-	ヨコナデ	ナデ	-	-	-	
15	3-15	7-15	土師器	甕	-	-	-	ヨコナデ	ナデ	ケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	-	-	
16	4-16	7-16	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	
17	4-17	7-17	土師器	甕	(20.2)	-	-	-	ヨコナデ ケズリ	-	ヨコナデ	ナデ	-	-	-	
18	4-18	7-18	土師器	甕	(15.6)	-	-	-	ナデ	-	ヨコナデ	ナデ	-	-	-	
19	4-19	7-19	土師器	甕	-	(8)	-	-	-	ケズリ ナデ	-	-	ナデ	-	-	

り、口縁はそのまま立ち上がっている。器面調整は外面が摩耗しているため不明である。内面はヘラミガキを施している。

11は内外面とも黒色処理を施しているロクロ使用の土師器の甕である。器形は身の部分を作り出した後につまみの部分を張り付けているもので、端部はほぼ直線的に折れ曲がり、先端部が細くなっている。器面調整は内外面ともヘラミガキが全面に施されている。

12はロクロ使用の土師器の甕である。器形は胴部の中程に最大径をもつもので、胴中央部が膨らみ頸部ですぼまり、口縁部が外傾して口縁端部に至る。器面調整は内外面ともロクロ痕が

残り、胴中央部から底部にかけてヘラケズリを施している。底部の切り離し技法は底面が摩耗しているため不明である。

13はロクロ使用の土師器の小型甕破片である。器形は底部から立ち上がり、頸部ですばまり外傾して口縁部に至る。口唇部は上方に挽き出されている。器面調整は内外ともロクロ痕だけである。底部切り離し技法は回転糸切りのようである。

16はロクロ使用の土師器の甕である。器形は破片のため不明であるが、口縁部が外傾し、口唇部が上方に挽き出されている。器面調整はロクロ痕だけである。

14、15、17は整形時にロクロを使用した土師器の甕である。器形は何れも破片のため全体形を推し量るものはないが、14は口縁部が外傾するもの、15が胴中央部が腰らむもの、17が口縁部が外側に頸れるものである。器面調整は15、17では外面がロクロ整形後に、15では胴中央部から下位にかけてヘラナデやヘラケズリが施され、17は頸部付近から下位にかけてヘラナデやヘラケズリが施されている。内面は14、15、17ともヘラナデが施されている。

18、19はロクロ不使用の土師器甕の破片である。器形は18が頸部でくびれ、口縁部は外反し、口唇部は丸くなっている。器面調整は内外面とも口縁部がナデ、体部がヘラナデが施されている。19は底部破片で胴部から底部にかけての下端ですばむ。器面調整は外面がヘラケズリとヘラナデ、内面がヘラナデである。

20は土製の錘の破片である。破片のため全体形は不明であるが、紡錘形のものと思われるもので、長軸方向に穴が穿たれている。

21は刀子の身の部分の破片である。両面平造りと思われるが錆による腐食が進んでいることから正確には掴めない。

H23住居跡（第5、6図・写真図版3、8）

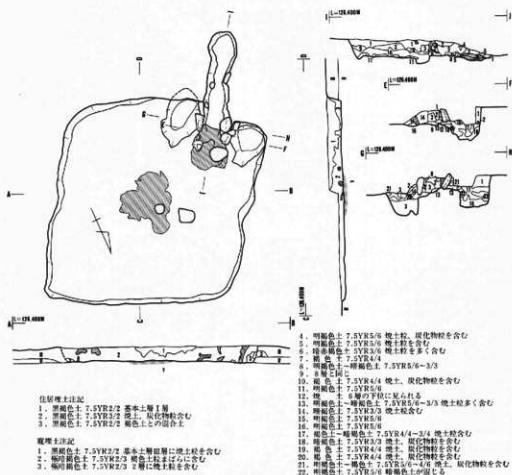
遺構

本住居跡は、基本土層のⅠ、Ⅱ層を除去した段階で焼土粒の広がり認められ、F28グリット付近で検出された焼土と同様と考え北側部分を掘下げたところ、土師器の出土が認められたところから住居跡であることが確認できた。先に確認できた焼土粒の広がり煙道部分であることが判明した。

<平面形・規模> 方形状を呈している。規模は南北下端3.13m、東西下端3.00mである。

<埋土> 3層に細分される。1層は黒褐色土で基本土層のⅡ層に対応する。2層は黒褐色土で焼土粒が北側部分に認められる。3層は褐色土のブロックである。全層に木根による攪乱が見られる。

<壁> 壁の立ち上がりは黒褐色土層中では木根による攪乱があることから良く促える事は出来なかったが、V層面を僅かに掘り込んでいることから判断するとほぼ垂直に立ち上がっている。



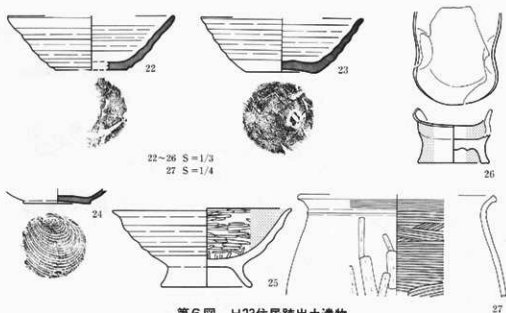
第5図 H23住居跡

るようである。壁高は24cmである。

〈床面〉 基本土層のV層面を僅かに掘り込んでいる。全体的に木根によって攪乱されているが床は概ね平坦であり、竈周辺は比較的固く締まっている。また、中央部には焼土が形成されその周辺もやや固く締まっている。

〈焼土〉 竈以外に住居の中央部の床面に約1mの範囲に不規則に広がって見られた。V層が強く焼けて赤変したもので、焼土の厚さは約4cmである。

〈土坑〉 2基検出された。土坑1は竈の東脇に位置し、壁の一部を掘り込んでいる。平面形は楕円形状で、規模は上端98×50cm、下端54×28cm、深さは35cmである。埋土は褐色土や暗褐色土からなり、焼土粒、炭化物粒を僅かに含んでいる。層全体は比較的固い。この土坑には土師器の坏(第6図22~25)が埋土下位から出土している。特に25は底面に張り付いて出土して



第6図 H23住居跡出土遺物

土器観察表

No	調査番号	写真番号	種類	器種	注記(寸定値)			外面調整			内面調整			成形	張り廻し	その他
					口縁径cm	口径cm	器高cm	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部			
22	6-22	8-22	土師器	坏	(13.4)	5.8	4.3	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	
23	6-23	8-23	土師器	坏	(13)	5.7	4.4	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	
24	6-24	8-24	土師器	坏	-	5.3	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	
25	6-25	8-25	土師器	高台付杯	14.4	7.2	6.3	-	-	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	-	
26	6-26	8-26	土師器	高台耳置	(6.3)	5.8	(4.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	
27	6-27	8-27	土師器	壺	(20.4)	-	-	ヨコナテ	ナズリ	-	ヨコナテ	ハケメ	-	-	-	

いる。土坑2は竈の東脇に位置する。平面形は円形状で、規模は上端68×50cm、下端37×40cm、深さ30cmである。埋土は暗褐色土に明褐色土が混在するものである。本土坑の埋土中にも土師器の小破片が入っている。

<柱穴> 検出されなかった。

<竈> 南西壁の西隅脇に位置する。焚き口部から煙出し部までの総長2.24m、煙道部分は1.15mである。煙道の長軸方向はW-59° - Sである。竈部分は残された形状から、石が抜き取られたり、土が流出しているものと考えられる。左袖部分の抜き取り痕等から見るとこの竈の袖は約30cm大の亜角礫や扁平な河原石を6個位使って入るようである。また、残されている石を見ると内側部分に相当する部分の表面は加熱のため赤変している。燃焼部は60×60cm、深さ6cmの浅い窪み状となり、焼土が堆積している。煙道は木根によって攪乱されているため確実に捉えられたものではないが、燃焼部から僅かに上がり壁付近から平坦に延びて煙出し部

分に至る。燻出し部分は残された形状から円形状と思われる。

時期は出土遺物から平安時代と思われる。

出土遺物（第6図・写真図版8）

遺物は土師器のみ出土している。出土状態は22～25が土坑1の埋土中から出土し、26は床面上、27は竈西脇の床面上から出土している。

22～24はロクロ使用の土師器坏で内面黒色処理を施していないものである。底部の切り離し技法は回転糸切りである。器形の体部がほぼ直線的に立ち上がって口縁部に至るもので、口縁部はやや丸みを帯びている。器面調整は内外面ともロクロナデ痕だけである。

25はロクロ使用の土師器の高台付き坏で、内面黒色処理をほどこしているものである。坏部の器形は体部がやや膨らみを持って口縁部に至り、口縁部はやや外傾している。台部は脚の短いもので「ハ」字状に開いている。器面調整は内面にヘラミガキが施され、外面はロクロナデ痕だけである。

26はロクロ使用の土師器の高台付き耳皿で内外面とも黒色処理を施しているものである。器形は口縁部の両端が凹んでいるものである。器面調整はヘラミガキを施しているようである。台部は脚の短いもので「ハ」字状に開いている。

27はロクロ不使用の土師器甕である。器形は体部が膨らみ頸部がくびれ口縁部が外傾している。器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部の外面が縦位のヘラケズリ、内面がハケメである。

H26住居跡（第7図・写真図版3、8）

遺構

本住居跡は、調査区東側の平坦部に検出され、南東側は「だの沢」によって開削されている。検出面はⅢ層上面であるが、土層面からⅡ層面が掘り込み面であることが確認された。

<平面形・規模> 平面形は残された形状から方形状と考えられる。規模は検出された部分から1辺2m強と考えられる。

<埋土> 2層に細分される。1層は黒褐色土で、基本土層のⅠ層に焼土粒や炭化物粒が極僅かに入るものである。2層は黒褐色土で炭化物粒を多く含む。

<床面> V層面を僅かに掘り込んでいる。ほぼ平坦であり、北側の床部分は約80cmの幅でシルトと黒褐色土の混合土によって厚さ約10cmの貼り床がされている。

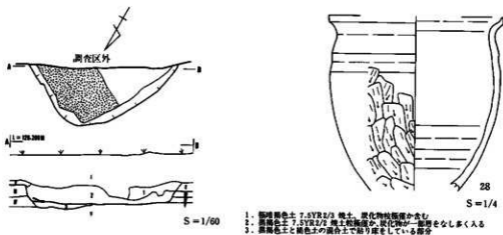
<柱穴> 柱穴は検出されなかった。

<竈> 竈は調査された部分には検出されていない。

時期は出土遺物から平安時代と考えられる。

出土遺物（第7図・写真図版8）

床面に貼り付く様に甕の破片1点が出土している。ロクロ使用の土師器甕で、器形は頸部



第7図 H26住居跡・出土遺物

土器観察表

No	調査番号	不具番号	種類	器種	寸法 (検定値)		外面調整		内面調整		成形	切り出し	その他	
					口縁径cm	底径cm	器高cm	口縁部	体部	底部				口縁部
28	8-28	8-28	土器器	甕	(口.4)	-	-	-	ケズリ	ケズリ	-	-	-	-

でくびれ、口縁部が外傾し、口縁は上方に挽き出されている。器面調整は内面がロクロ痕、外面上部がロクロ痕、体部上方から底部にかけて縦位のヘラケズリが施される。

125住居跡 (第8～10図・写真図版4、8、9)

遺構

調査区南東部の平坦面に位置し、H23住居跡の南東7m付近にある。東側にはH26住居跡が近接する。この住居跡は、当初トレンチに南側が半分掛かって検出されたが、木根による攪乱と土坑部分のため住居跡と思われなかった。また、煙道部分の検出面でも木根による攪乱により、明確なプランが得られなかった。

<平面形・規模> 平面形は方形状である。規模は東西方向3.60m、南北方向3.40mである。

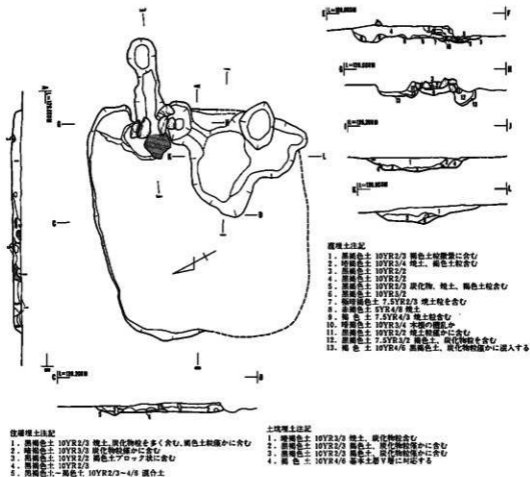
<埋土> 埋土は5層に細分される。上位から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土の順で、各層に微量の炭化物が混入している。

<壁> 南側の立ち上がりは不明瞭である。壁高は北壁で最大11cmである。

<床面> 基本土層V層を僅かに掘り込んでいる。床面は全般に木根による小さな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。南東部は土坑により攪乱されている。

<柱穴> 検出されなかった。

<竈> 南東壁北側寄りに構築されている。竈き口部から煙出し部までの総長1.9m、壁外約1mである。煙道の長軸方向はS-68°-Eである。竈部分は木根によって攪乱されており、



第8図 125住居跡

不明である。袖部は角礫を芯材としシルトで覆っているようである。

<土坑> 南東部に位置し、平面形は不整形を呈する。規模は長辺1.9m、短辺1.4m、深さは10cm~25cmである。2基の土坑が重複していると考えられるが、木根による擾乱のため明確にできなかった。埋土は3層に細分される。底面から焼土が検出されているため、竈の作り変えも考えられる。時期は出土遺物から平安時代と思われる。

出土遺物（第9、10図・写真図版8、9）

遺物は土師器、須恵器が出土している。出土状態は34が土坑内から、36が竈内から出土し他のものは住居埋土の主にも東側から出土している。

29～33はロクロ使用の土師器坏で内面黒色処理を施しているものである。底部の切り離し技法は29、30、33で見ると回転糸切りである。器形は体部から口縁部にかけて直線的であり、口縁端部は丸みを帯びている。器面調整は内外面ともロクロナデ痕だけである。なお、31には体部に口縁部を上にして墨書きによる「瓦」の字が書かれている。一部を欠いているため判読できない。

34はロクロ使用の土師器坏で内面黒色処理を施しているものである。底部の切り離し技法は回転糸切りである。器形は体部がやや膨らみを持って口縁部に至り、口縁端部はやや丸みを帯びている。器面調整は外面ロクロナデ、内面ロクロナデ後ヘラミガキである。

35はロクロ使用の土師器高台付き坏で内面黒色処理を施したものである。底部の切り離し技法は破片のため不明である。器形は体部がやや膨らみ口縁部に至り、口縁はやや外傾し細くなっている。器面調整は外面がロクロナデ痕、内面がロクロナデ後にヘラミガキである。

36はロクロ使用の土師器の鍋破片である。器形は体部がやや膨らみ口縁部が外側に若干そっている。口縁端部は角張り、口唇部は幾分凹状である。器面調整は外面は口縁部がロクロ痕、体部がロクロ痕の上に縦位のヘラケズリで、内面は口縁部がヘラナデ、体部がハケメである。

37はロクロ使用の土師器甕である。器形は破片のため不明であるが、口縁部が外傾している。器面調整は内外面ともロクロ痕だけである。

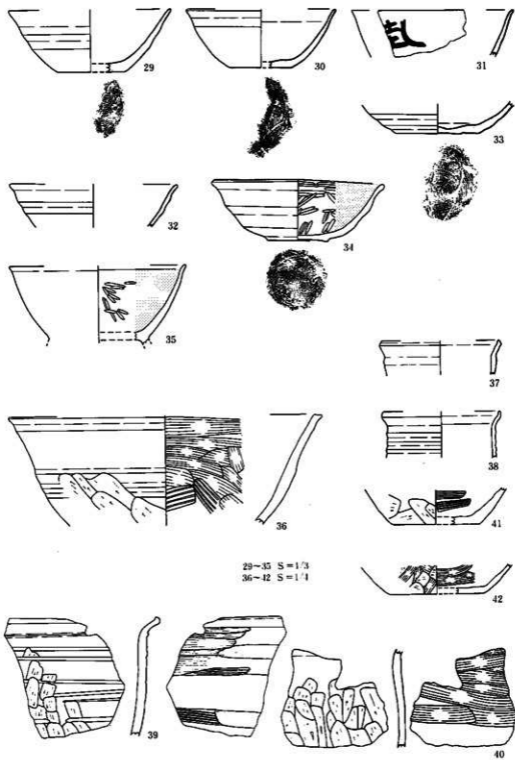
38はロクロ使用の土師器甕である。器形は破片のため不明であるが、口縁部が外傾している。器面調整は内外面ともロクロ痕だけである。

39は成形時にロクロを使用した甕破片である。器形は口縁部が外傾しているもので口縁端部はやや上方に挽き出されている。器面調整は外面がロクロ成形後、胴部に縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデである。

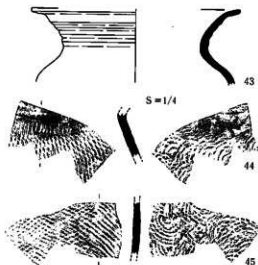
40はロクロ不使用と見られる土師器甕の胴部破片であるが、器形は不明である。器面調整は外面が縦位のヘラケズリ、内面がヘラナデである。

41、42はロクロ不使用の土師器甕の底部片である。器面調整はどれも外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

43～45は須恵器の甕の口縁部、頸部、体部の破片である。どれも同一個体のものである。器形は破片の為金体形は不明であるが、頸部でくびれて口縁部が「く」字状に外傾して、口縁端部は丸くなっている。器面調整は口縁部ではロクロ痕だけであり、頸部の下方からは、外面が平行叩き具痕、内面が青海波文の当て具痕である。



第9圖 | 25住居跡出土遺物 1



第10図 | 25住居跡出土遺物2

土器観察表

No	調査番号	写真番号	種類	器種	法線 (垂直線)			外周調査			内面調査			成形	切り出し	その他
					口縁径cm	底径cm	器高cm	口縁部	底部	器底	口縁部	底部	器底			
29	9-29	8-29	土師器	坏	(13)	(5.2)	5	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸割り	
30	9-30	8-30	土師器	坏	(12)	(4.6)	4.7	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸割り	
31	9-31	8-31	土師器	坏	(13)	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	黒漆有
32	9-32	8-32	土師器	坏	(13.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	
33	9-33	8-33	土師器	坏	-	6.6	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸割り	
34	9-34	8-34	土師器	坏	13.8	4.8	5.5	-	-	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	糸割り	
35	9-35	8-35	土師器	高台付坏	(14.2)	-	-	-	-	-	-	ミガキ	-	ロクロ	-	
36	9-36	8-36	土師器	甕	(33)	-	-	-	-	ケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	-	-	
											ハケメ	ハケメ	-	-		
37	9-37	8-37	土師器	甕	(12.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
38	9-38	8-38	土師器	甕	(12.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
39	9-39	8-39	土師器	甕	-	-	-	-	ケズリ	-	-	ナデ	-	-	-	
40	9-40	9-40	土師器	甕	-	-	-	-	ケズリ	-	-	ナデ	-	-	-	
41	9-41	8-41	土師器	甕	-	(9.2)	-	-	ケズリ	-	-	-	ハケメ	-	-	
42	9-42	8-42	土師器	甕	-	(10)	-	-	ケズリ	-	-	ナデ	-	-	-	
											ナデ	-	-	-		
43	10-43	9-43	須恵器	甕	(22.2)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
44	10-44	9-44	須恵器	甕	-	-	-	-	平行叩き具痕	-	-	青濁紋文	-	-	-	
45	10-45	9-45	須恵器	甕	-	-	-	-	平行叩き具痕	-	-	青濁紋文	-	-	-	

(2) 土坑

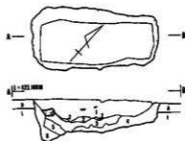
土坑は5基検出された。何れも調査区東側の基本土層のⅡ層からⅢ層中の黒色土層中で検出されており、一部の土坑では平面形が良く分からないものもある。平面形からは円形が2基、楕円形が1基、長方形が2基に分けられる。

B31土坑 (第11図・写真図版5)

調査区の北東部の崖際の緩斜面に位置する。検出面はⅢ層の黒褐色土層中で若干の土色の違いが認められたが判然としないため、輪郭がはっきりする面まで掘下げて確認した。平面形は

長方形であり、長軸方向は $N-50^{\circ}-E$ である。規模は開口部径 $2.01m \times 0.96m$ 、底面径 $1.80m \times 0.67m$ 、深さは確認面から北東側で $32cm$ 、南西側で $70cm$ である。壁は木根による攪乱が見られるが北東から南西に向かって緩やかに傾斜し、南西側では更に低くなっている。特に堅い面はない。埋土は6層に細分され、上位～下位にかけて黒褐色土であるが、2層中には砂粒状の褐色土が多く入る。4～6層中にはV層の褐色土粒を含んでいる。土層の堆積状況は上部が自然堆積であるが下位に関しては分からない。出土遺物はない。

遺構の時期は出土遺物がないため特定できない。

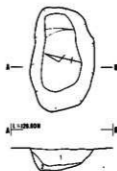


1. 黒褐色土 7.5YR2/3 炭化物粒を含む
2. 黒褐色土 10YR4/4 砂子の細かい土で火山灰?とも見られる
3. 黒褐色土 7.5YR2/2 炭化物粒豊富に含まれる
4. 暗褐色土～黒褐色土 7.5YR2/3-10YR2/3 炭化物粒豊富、V層のフロッグが入る
5. 黒褐色土 7.5YR2/2
6. 暗褐色土～黒褐色土 7.5YR2/3-10YR2/3 V層を多く含む

第11図 B31土坑

F23土坑No.2 (第12図・写真図版5)

調査区中央部の南西側に位置する。H23住居跡の約10m西側とF23土坑No.1の5m南西側の平坦面で検出した。検出面はⅢ層面で土色の変化が確認できたが、輪郭が判然としないためⅢ層下位まで掘り下げて確認した。平面形は長形状であり、長軸方向は $N-80^{\circ}-E$ である。規模は開口部径 $1.66m \times 1.02m$ 、底面径 $1.24m \times 0.63m$ 、深さは確認面から、東側 $15cm$ 、西側 $34cm$ である。壁は木根によって攪乱されているが、底面から開口部に向かって外傾している。底面も木根によって攪乱されているが、東から西に向かって緩やかに傾斜している。特に堅い面はない。埋土は2層に分かれ1層は黒褐色土に褐色土が僅かに混じる。2層は褐色土と黒褐色土の混合土層である。土層の堆積状況は自然堆積のようであるが良く分からない。遺構の時期は出土遺構がないことから特定出来ない。

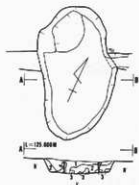


1. 黒褐色土 10YR2/3 木根による攪乱が多い
2. 黒褐色土 10YR4/4 黒褐色土が豊富に含まれる

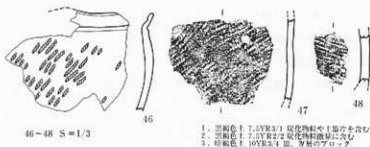
第12図 F23土坑No.2

E26土坑No.2 (第13、14図・写真図版5、9)

調査区東側E26区の平坦面に位置する。E26陥し穴No.1、E26土坑No.3とはそれぞれ1～2mの間隔で離れている。検出面はⅡ層面で土層の変化が認められたが、輪郭が判然としないためにⅣ層上面まで掘り下げて確認した。平面形は長楕円形状であり、長軸方向は $N-30^{\circ}-W$ である。規模は開口部径 $2.12m \times 1.20m$ 、底面径 $1.95m \times 1.03m$ 、深さは最終の確認面から中央



第13図 E26土坑No.2



第14図 E26土坑No.2 出土遺物

土器観察表

No	採取番号	写真番号	種類	部位	寸法(測定値)			文様等	その他
					口縁径cm	底径cm	高さcm		
46	14-46	9-46	鉢	口縁部破片	—	—	—	透眼・溝口部に沈線・縄文LR	
47	14-47	9-47	鉢	体部片	—	—	—	縄文LR	
48	14-48	9-48	鉢	体部片	—	—	—	縄文LR	

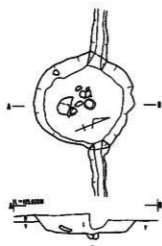
部で21cmである。壁面は底面からやや外傾して立ち上がる。底面は北西側の一部に盛り上がった部分が60cmの範囲で見られる以外はほぼ平坦である。埋土は3層に細分される。1層が木根によって攪乱された黒褐色土、2、3層が褐色土と黒褐色土の混合土である。

出土遺物は埋土下位から46-48の3点が出土している。46は鉢の口縁部破片で、頸部でくびれ、口縁部は波状ないし突起が付くものと思われる。沈線は口縁部の内側と頸部の外面に1条見られる。体部には縄文LRを施した後に表面を軽くナデている。47、48は鉢もしくは鉢の体部破片で、47は縄文LR、48は縄文RLが施文されている。これら土器片は縄文や器形から弥生時代のものと思われる。なお、本土坑の北側脇から土偶（第26図-96）が出土している。

F23土坑No.1（第15、16図・写真図版5、9、11、15）

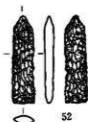
調査区中央部の平坦面に位置し、近くにはF23土坑No.2が3m離れている。検出面はIV層上面である。重複関係は溝No.1に一部切られている。平面形は円形である。規模は開口部径1.60×1.50m、底面径1.26×1.22m、深さは検出面から31cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、底面のほぼ中央に開口部径17cm、底面径13cm、深さ9cmの副穴がある。埋土は2層に分かれ、1層は黒褐色土に炭化物が混入している。2層は黒褐色土と褐色土の混合土である。

出土遺物は埋土中から土器、石器が出土している。土器は49-51の3点で鉢ないし鉢の体部破片であり、50、51は同一個体と見られる。何れも縄文が施文され、49はRL、50、51はLRの縄文が施文されている。これら土器は縄文時代のもと考えられる。石器は52、53の2点である。52は側縁部が長い平面五角形の平基式の石鎌か石錐と思われるものである。剥片の側縁部から調整剥離を施して形を整えているもので、身は薄くなっている。また、側縁部の約3分

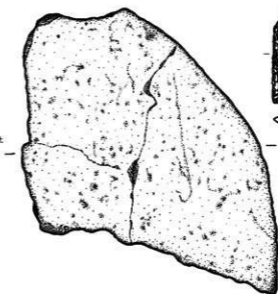


1. 黒褐色土 7.5YR2/2 炭化物物層状を含む
2. 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土と褐色土の混合土

第15図 F23土坑No.1



- 49-51 S=1/3
52 S=1/2
53 S=1/4



53

第16図 F23土坑No.1出土遺物

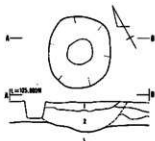
土器観察表

No	図版番号	写真番号	種類	部位	法注(測定値)			文様等	その他
					口縁径cm	底径cm	器高cm		
49	16-49	9-49	鉢	底部分	-	-	-	地文L.R	
50	16-50	9-50	鉢	底部分	-	-	-	地文L.R	
51	16-51	9-51	鉢	底部分	-	-	-	地文L.R	

の2程基部寄りに僅かに凹む部分があり、その部分まで柄が付けられていたようである。53は石皿の破損品である。表裏の中央部が薄くなっている。

E26土坑No.3 (第17図・写真図版5)

調査区東側の平坦面に位置する。本遺構は平面では観察されなかったが、土層断面の観察によって確認され、掘り込み面もⅡ～Ⅲ層中からの掘込みみであることが分かったものであり、しかもV層面に対する掘り込みは浅い遺構である。平面形はV層面で円形状である。規模はV層面の上端で1.14m×1.00m、底面で直径40cm、深さはⅡ層面から約48cmである。埋土は2層に分かれるが、1、2層とも黒褐色土で基本土層のⅡ、Ⅲ層の混合土である。



1: 黒褐色土 7.5YR3/2 基本土層と同一
2: 黒色土 7.5YR2/1 炭化物粒混入、褐色土粒が入る

第17図 E26土坑No.3

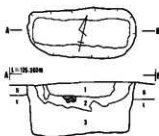
出土遺物はない。

(3) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は調査区東側で4基検出されている。平面形が長方形が3基と溝状1基であり、長方形のものには長軸方向が同一方向を向いていることから同時期と見られる。

C29陥し穴状遺構No.1 (第18図・写真図版5)

調査区北東側の平坦面に位置する。検出面はIV層面である。平面形は長方形であり、長軸方向はN-78°-Eである。規模は開口部径1.72m×0.79m、底面径1.54m×0.42m、深さは検出面から82cmである。壁は底面からはほぼ垂直に立ち上がる。底面は東側から西側に向かって若干下がっている。埋土は3層に分かれる。1層は極暗褐色土に炭化物粒が混じっているもので比較的固く締まっている。2層は暗褐色土から黒褐色土で炭化物粒を含んでいる。3層は褐色土から暗褐色土で炭化物粒を含み柔らかい。埋土は全層とも人為層で、埋め戻されている。出土遺物はない。

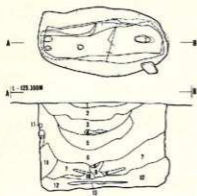


1: 極暗褐色土 7.5YR2/3 炭化物粒を含む
固く締まっている
2: 暗褐色土～黒褐色 10YR3/4～7.5YR2/2
炭化物粒混入、Ⅱ、Ⅲ層の混合土、Ⅱ/Ⅲ
3: 褐色土～暗褐色土 10YR4/4～10YR3/3
混合土、炭化物粒混入

第18図 C29陥し穴状遺構No.1

C29陥し穴状遺構No.2 (第19図・写真図版5)

調査区東側の緩斜面に位置する。検出面はIV層面である。平面形は長方形であり、長軸方向はN-75°-Eである。規模は開口部径2.09×1.11m、中場径1.91×0.64m、底面径は1.94×0.80m、深さは検出面から東端で1.32m、西端で1.42mである。壁は短軸側が底面から中場にかけてはほぼ垂直に立ち上がり中場から開口部にかけては外傾している。長軸側は底面から垂直に立ち上がってある。底面は東から西にやや下っている。逆茂木痕と思われる杭穴は底面の東側と中央部に1個、西側に2個見られ、東側と西側のものは45度内側に傾き、中央部のものはほぼ垂直に見られる。規模は東側からそれぞれ直径12cm、8cm、6cmで、深さは底面から



1. 暗褐色土 7.5YR3/3
2. 暗褐色土 7.5YR4/3
3. 暗褐色土 7.5YR3/3 炭化物粒含む
4. 褐色土 7.5YR4/6
5. 暗褐色土～褐色土 7.5YR2/3～7.5YR4/3 シルト質土
6. 褐色土 7.5YR4/4
7. 褐色土 10YR6/6 柔らかい
8. 暗褐色土 7.5YR2/3
9. 暗褐色土 10YR3/3 柔らかい
10. 濃い黄褐色土 10YR4/3 粒子が細かく混在す
11. 黄褐色土～濃い黄褐色土 10YR6/8～10YR6/4 粒子が細かい硬の凝結土
12. 灰褐色土～褐色土 7.5YR4/2～7.5YR4/3 水酸化鉄を含む
13. 濃い黄褐色土 10YR6/4 砂土

第19図 C29陥し穴状遺構No.2

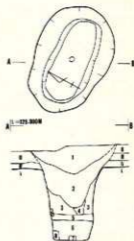
10cm程である。埋土は13層に細分されるが、凡そ上層と中層、下層に分けられ、上層は暗褐色土～褐色土で炭化物粒を含んでいる。中層は褐色土～暗褐色土、下層は褐色土～暗褐色土である。上層は土層の堆積状況や混入物から人為層、中層から下層は自然層と考えられる。

出土物は、2、3層から土器の細片と黒曜石製の小型の石核とチップが1点ずつ見つまっている。



第21図 E26陥し穴状遺構No.1 出土遺物

1. 暗褐色土 7.5YR3/3 炭化物粒、径2-10cmの小石を多く含む
2. 暗褐色土 7.5YR2/2 炭化物粒が混入
3. 暗褐色土 10YR3/4 土層の混在
4. 暗褐色土 10YR3/2 砂子の混在、硬軟か?
5. 暗褐色土 10YR3/3 砂子が混在、注釈的硬く締る
6. 暗褐色土 10YR2/4 砂多量含む、硬く締まる
7. 暗褐色土 10YR2/3 砂多量か?
8. 砂 層 基本土層階層に相当する、顔り蓋部分



土器観察表

第20図 E26陥し穴状遺構No.1

No	調査番号	写真番号	種類	部位	形状 (断面形状)			文 類 号	その他
					口縁径mm	底径mm	器高mm		
54	19-54	9-54	鉢	底部片	-	-	-	不明	
55	19-55	9-55	鉢	底部片	-	-	-	不明	
56	19-56	9-56	鉢	底部片	-	-	-	沈積	

E 26陥し穴状遺構No. 1 (第20、21図・写真図版5、9)

調査区東側の平坦面に位置する。遺構の検出面はⅡ層上面である。平面形は長方形状であり、長軸方向は $N-86^{\circ}-E$ である。規模は開口部径 $1.78 \times 1.20m$ 、中場径 $1.43 \times 0.70m$ 、底面径 $1.35m \times 0.50m$ 、深さは検出面から $1.52m$ である。壁は開口部が崩れて外傾して広がっているが、中場から底面にかけては長軸側、短軸側ともほぼ垂直である。底面は下位の砂層まで掘り込まれて若干の凹凸があるが、平坦である。また、底面中央には逆茂木の杭跡が1個ある。規模は直径 $9cm$ 、深さ $10cm$ 以上である。埋土は8層に細分され、1層は黒褐色土で小礫や土器片が含まれている。2、4層は黒褐色土、3層は黒褐色土と褐色土の混合土である。5層は暗褐色土で砂、小礫を含み、固く締まっている。6層は暗褐色土で礫を含み、7層は黒褐色土、8層は砂層である。1層は堆積状況から人為層、2、3層は自然層、5、6は埋め戻された人為層、4、7層は逆茂木の杭痕と見られる。また、5、6層の堆積状況から本遺構の底面は5層上面ではないかと考えられる。すなわち一旦砂層まで掘り込んだ後に5、6層を埋めて杭を差し込んだと考えられる。

出土遺物は54~56の土器片が1層中から出土している。何れも縄文は見られないが、56の土器破片の上下に沈線が2条見られる。土器の胎土等から同一個体の破片と見られるが、時期は特定できない。

H26陥し穴状遺構 (第22図・写真図版5)

調査区東側の平坦面に位置し、検出面はⅣ層上面である。平面形は溝状で、長軸方向は $N-35^{\circ}-E$ である。規模は開口部径 $3.56 \times 0.12m$ 、底面径 $3.36 \times 0.12m$ 、深さは検出面から $92cm$ である。壁は開口部が崩れて外傾するが、中程から底面にかけて垂直である。底面はほぼ平坦である。埋土は4層に細分され、1層が黒褐色土、2層が黒色土、3、4層が褐色土である。土層の堆積状況は全層とも自然堆積である。出土遺物はない。



第22図 H26陥し穴状遺構

(4) 焼土

F 26焼土 (第23図・写真図版6)

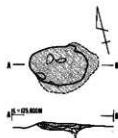
調査区東側の平坦面のⅡ層上面で $80 \times 60cm$ の範囲に焼土が $9cm$ 程比較的堅く堆積して見られたものである。この焼土は焼土面が堅いことから現地性の焼土であることは間違いない。また、溝No.2と一部で重複しており、溝No.2よりは新しいことも確かめられたが、この焼土の時期は周辺から遺物が出土していないため特定できない。

なお、この焼土を検出した東側の地区に同じⅡ層面で焼土粒が散在して分布していたが、本遺構と関わりがあるかは、捉えることが出来なかった。また、焼土粒が散在していた地区にはⅡ層下位～Ⅲ層上面にかけて弥生時代の土器片と剝片などが出土しているが、特に強く焼けていないことから、投げ捨てられている焼土粒であろうと考えられる。

(5) 溝跡 (第24図・写真図版6)

調査区の中央部から東側のⅡ～Ⅲ層中で3条検出され、その内1条は途中で枝分かれし、他の1条は単独で検出されている。

溝№1は調査区G22グリットから北東方向に延び、F22グリットで東側に曲がりそのまま東方向に延びている。最終的には沢に向かって

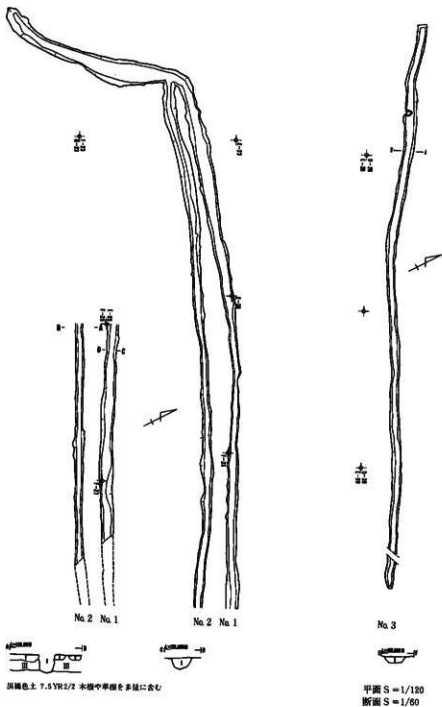


1. 黒褐色土 5YR4/6～4/8 焼土
2. 暗赤褐色土 5YR2/3 焼土
3. 暗褐色土 7.5YR2/2 焼土の
形状が輪郭かに見られる

第23図 F26焼土

いるものと思われる。西側ではV層面を掘り込んでいるが、東側では黒褐色土層中にあることから全容を確認することは出来なかった。溝№2は溝№1が東方向に曲がる直前で重複しているが新旧関係は不明である。溝№1と平行していることや溝№1よりも深く掘り込まれていることから或は溝№1よりも新しいものかも知れない。この溝もやはり沢に向かって延びていると考えられる。溝№3はD25グリットからD28グリット部分で東西に見られ、調査途中で確認できたものであり、西側の延長部分は不明であるが、やはり沢に向かっているものと考えられる。この溝はE27住居跡と重複しているが、住居跡より新しい。埋土は何れも黒褐色土で木根が多量に含まれている。規模は溝№1が総長32m、幅30cm、深さ20～30cm、溝№2が総長26m、幅30cm、深さ30～40cm、溝№3が総長18m、幅26cm、深さ20cmである。

溝の時期は溝№2が焼土と重複関係にあり焼土よりは古く、溝№3がE27住居跡より新しいことが確かめられているが、溝の構築された時期の詳細については不明である。



第24図 溝跡

(6) 遺構外出土遺物 (第25～32区・写真図版9～15)

主に調査区中央部から東側の表土からV層上面にかけて出土している。出土遺物の多くはⅡ層下位～Ⅲ層上部で出土している。

出土遺物として、土器は土師器、須恵器片と縄文土器片、弥生土器片、石器は剥片石器類と礫石器類で、他には土製品、古銭である。

土器

土師器、須恵器の歴史時代の遺物と縄文・弥生時代のものが出土している。分類にあたっては出土量が少ないため、土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器に分けた。

土師器：Ⅰ層～Ⅱ層中に3点がそれぞれ単独に出土している。57は平底状丸底を呈している坏である。ロクロ不使用の内面黒色処理を施している。器面調整は、内外面ともヘラミガキが施されている。器形は底部から口縁部にかけてやや膨らみを持っている体部で、口唇部は丸くなっている。58はロクロ使用の高台付き坏の内面黒色処理を施している高台部片である。器面調整は、坏部の内面にはヘラミガキ、高台部はロクロ痕である。高台部は坏部分に「ハ」字状に広がる脚の短いものを取り付けている。59はロクロ使用の臺底部片である。底部の切り離し技法は回転糸切りと思われるが摩滅のため良く捉えられない。

須恵器：調査区のB30区のⅠ層下位から60の1点が出土している。破片のため全体形を窺い知れないが、形態から高坏の脚部破片の一部で、柱状部は中空となり、脚は細く、裾部はラッパ状に開く器形と思われる。脚中央部には隅丸長方形のスカシを3方に持つようであり、スカシは外方から穿孔され、表面の周囲はヘラを用いて粘土を丁寧に取り除いて器面調整をしている。凸帯は裾部近くとスカシの下位約1cmの部分にそれぞれ1条巡っている。凸帯は断面半円状である。裾部は凸帯のあり方から段を成して端部に至っている。端部はやや丸く仕上げられている。胎土は鉄分を含んだ粘土で、表面には焼成時に吹き出した鉄分が見られる。色調は新鮮面で青灰色である。この脚部は残存形状から、長脚2段3方透かしのものと考えられる。

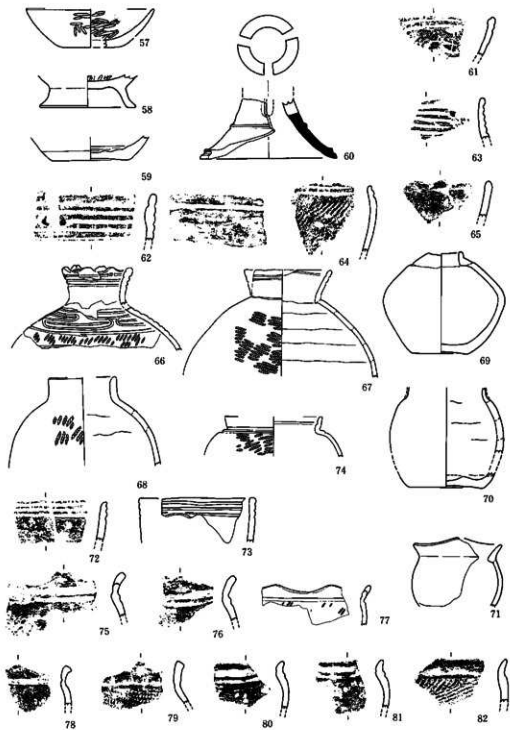
縄文土器：縄文時代の土器と言えるものは61～65の5点である。61は鉢の口縁部近くの破片と思われるもので、口唇部に1条の沈線が巡っている。文様は器表面全体が摩滅のためはっきりしないが、口縁部直下に2条の平行する沈線を巡らし、その下位には雲形文と見られる文様を施文している。縄文は沈線施文後に糸の細い原体LRを施文している。62は深鉢の口縁部破片と思われる。文様は無文地に5条の平行する沈線を巡らし途中に2個1対の粘土粒が貼り付けられている。沈線は口縁部裏面にも1条巡っている。63は鉢ないし深鉢の口縁部破片と見られるものである。文様は平行する沈線を数条巡らし、一部に2個1対の粘土粒が貼り付けられているものと思われる。64は鉢の破片で、口縁部はやや内湾している。文様は口縁部直下に2条の平行する沈線が巡っているだけである。縄文は原体が細いLRが沈線直下から施文され

ている。65は壺の口縁部破片と思われる。口縁は小波状を呈している。文様はなく無文で、ナデが縦位方向に見られる。

弥生土器：器形や文様等から弥生時代の土器と思われるもので、調査区東側のF25～29、G25～G28区などのⅡ層下位～Ⅲ層上面にかけて出土している。以下、器形ごとに述べる。

壺形土器：66～74の9点である。66は口縁部がやや外傾するもので、口端部は6個の小波状を呈し、突部の上部にキザミが1条付けられている。文様は、口縁部が無文地に3条の沈線を巡らし、最上位の沈線内には3カ所に2個一対の粘土粒が付けられている。また、口縁部裏面にも突部に対応する部分に山形状の沈線が付けられ、その下位に1条沈線を巡らしている。頸部には流水文状の変形工字文が3単位に2段付けられ、胴部中位には平行する2条の沈線が付けられ、沈線間には条の細かい縄文LRが施文されている。67は口縁部が外傾し、胴中央部に最大径をもつ器形と思われる。口端部は平縁のようである。文様は、口縁部が口縁近くに無文地に沈線が2条平行して付されている。裏面にも1条口端部近くに巡っている。頸部から胴部にかけては、横走する縄文LRが施文されている。68は口縁部が直立する。文様は全体的に摩滅して分からないが、口縁部は無文で、胴部は縄文LRが施文されているようである。69は小型の壺で、69は口縁部が取れていないもの、70は胴部と底部片から復元したものである。文様は何れも無文でミガキが全面に施されている。70には外面に朱が見られ、内面には黒色の付着物が見られる。71は口縁部が外傾し、口縁が波状となるもので、文様は口縁部、胴部ともなく無文である。小型の袖珍土器とも見られるものである。72は口縁部片で口縁直下に4条の平行する沈線が巡るものである。73も口縁部破片で口縁直下に3条の平行する沈線が見られ、一部に波状するかと思われる沈線が見られる。74の器形は口縁部が短く、やや外傾しているもので、胴部が張るものである。文様は口縁部は無文で頸部に平行する2条の沈線を巡らしている。胴部には頸部の直下から縄文LRが施文され、縄文施文後に軽くナデられている。また、沈線は口縁部の裏面にも1条巡らされている。この土器の外面には煤状の炭化物が付着し、内面にも炭化物状の物が一部付着している。

甕形土器：75～87の13点である。75～82は何れも小型の甕と思われるもので、口縁部は外傾し、口端部には突起が付き小波状となるものである。75は突起頂部にキザミがつけられているもので、頸部の外面には沈線が2条平行して巡り、内面にも1条巡っている。文様は口縁部、胴部とも無文であり、ミガキを施している。内外面とも炭化物が付着している。76は突起頂部にキザミが付けられ、頸部の外面には沈線が2条平行して巡り、内面にも1条沈線が巡っている。文様は口縁部、胴部ともなく無文であり、ミガキを施している。75と同一個体の破片と思われる。77は口縁部が外反し口端部が波状を呈するもので、頸部には沈線が外面に1条、内面に1条巡っている。文様は口縁部、胴部ともなく、ミガキを施している。また、内面にもミガキを



第25圖 遺構外出土遺物 1

施している。78は突起部の上部が平坦状になっているもので、頸部には沈線が内外面に1条巡っている。文様は口縁部が無文で、胴部には縄文が施文されているが、縄文施文後にミガキがかけられていることから原体は不明である。79は突起が小さく、突起の上面は平坦である。文様は口縁部が無文で、胴部には横走する縄文LRが施文され、縄文施文後に軽くナデられている。内面にはミガキが見られる。80、81は75、76と同一個体の破片と思われる。82は鉢ないし広口甕の破片と思われるもので、口縁部は幅が短くやや外傾し、頸部は頸れている。文様はなく、口縁部は無文で、胴部にはLRの縄文が施文されている。83～87は大型の甕破片で、何れも口縁部が外傾し、頸部で頸れ、肩部がやや張り出す器形と思われる。文様は何れもなく、口縁部は無文で、胴部には縄文LRが横走ないし斜位に施文されている。83には口唇部に縄文側面圧痕が施文されている。

高台付き杯：88～91の4点がある。88は杯部の破片で、文様は沈線が3条平行して巡っている。89～91は台部の破片である。文様は沈線を3条一組として横位に巡らし、その下位には波状する沈線が見られる。

以上のほかには、所属する時期の不明な土器片がある。92、93は鉢ないし甕の底部片で、縄文LRが施文されている。94は縄文LRが施文されている。95は摺糸Lが縦方向に施文されている。

土製品

土製品は土偶と耳飾りと思われるものが出土している。

土偶：96の1点がE26グリットⅡ層下位面のE26土坑№3の壁際から出土している。頭部と両腕部を欠くものである。胸部には乳房を表現した粘土粒が付けられ、胴部下位には臍を表現した粘土粒が付けられている。文様は沈線と刺突によって衣服状の表現が表裏面に成されている。

耳飾り：97の耳飾り状の1点がF2区のⅡ層下位面から出土している。粘土を円筒状にしたものの中央部に両面から孔を穿っているものである。文様はない。作りが粗雑であることから耳飾りか明確ではない。

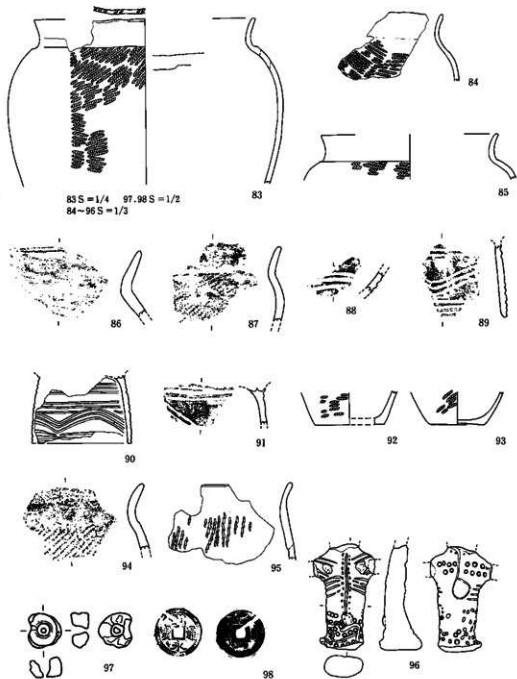
古銭

表土から98の寛永通宝1点が出土した。書体の特徴から古寛永通宝で、背に文字はない。

石器類

石器類は剥片石器と石核、剥片、礫石器、石製品が出土している。検出面は主にⅡ、Ⅲ層が主体であるが、中にはⅣ、Ⅴ層から出土しているものもある。掲載した以外には剥片や石核が縄文時代の晩期終末から弥生時代の土器破片に混じってE26区等から出土している。

剥片石器：99～117の19点であり、その内明確に石器となるものは8点程である。



第26圖 遺構外出土遺物2

石匙：99の1点で、Ⅲ層下位から単独で検出されている。縦長剥片の背面には細長い、恐らく押圧剥離に近い技術によると思われる加工が施されている。腹面には右側縁から下端にかけて加工が行われている。つまみ部分は小さく作られ、明確な快りとなっていない。

石筥ないし石筥状のもの：100～103の4点である。出土層位は100～102がⅢ層で103がⅣ層上面である。100は横長剥片の打面部と端部の両側縁を表裏面から打ち欠いて形を整えている。加工は片面は全面、裏面は縁辺に加えられている。101は薄身の剥片の縁辺部分にのみ加工を施しているものである。103は表裏全面に加工して、形を整え、刃部の加工は表面が刃部に直交するように調整が加えられ、裏面は刃部に平行して加工されている。この石器は両面加工であることや刃部が片刃状であることから、打製石斧の可能性もある。102は欠損品であり、全体形を窺い知れないものであるが、一応ここに入れたものである。加工は表裏面の縁辺部分にのみ加えられている。

不定形石器類：104、106～113の9点であるが、その多くが不定形の剥片の片面や縁辺に微細な剥離痕が見られるものである。特徴ある107、110の2点について見ると、107は縦長剥片が折れたと思われ、折れ面と先端部に調整加工が施されている。110は片面に自然面が残っている剥片で、腹面から縁辺部を打ち欠いて円形状に仕上げられ、腹面にも一部に調整剥離を施している。小剥片を採るための石核ともとれる。

剥片類：使用した痕跡のない剥片類であり、105、114～120のものであるが掲載以外にも数多くある。105はⅢ層下位から出土した縦長の剥片である。打点部は精査の際に欠損し、先端部に近い部分は成形のためか細かく剥離された痕が見られる。103の石器と近い所に出土している。114～117は弥生時代の土器片と共に出土した。何れも薄身の剥片であり、114、115、117は背面を見ると上下から剥片を剥離していることが窺える剥片である。118、119は調査区西側の崖錐性堆積物である凝灰岩質の礫群中とⅤ層上面に硬質泥岩質の大型剥片が出土したものである。118は2点が接合している。剥離面の殆どは自然に割れた面であるが、118-2の側面の一部に人為的に剥離されている部分が見られる。石器となるかは現段階では分からない。119は2点が接合したものである。剥片の形状は2点とも角柱状の剥片である。打点と思われる部分は礫核の中央部にあり、1回の打撃で3片に割れている。この剥片も自然か人為的に割られているか良く分からない。120は流紋岩質の剥片で、周辺が幾分か打ち欠かれている。

礫器：礫器としたものは121、122の2点で、扁平な礫の一端を打ち欠いて、チョッパー状になっているが、見方によっては小型の剥片を剥離した石核ともとれる。121は両面を打ち欠き、122は片面を打ち欠いているものである。

石斧：123～128の6点である。123は比較的大型の厚みのある剥片素材のもので、片面に自然面を持ち、基部は細く調整され、剥片の両側縁の周辺の片面を成形調整している。刃部は片

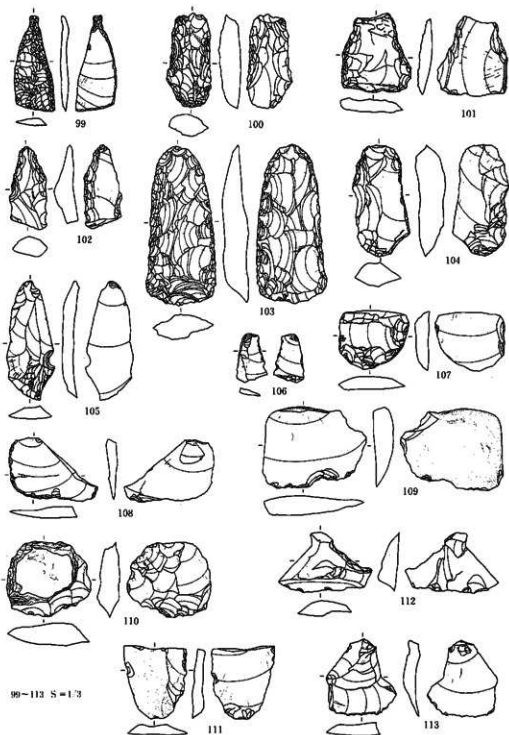
刃状である。124は磨石の破片を利用したと思われるもので、片面は成形調整をほどこしているが、裏面は磨面そのままである。刃部は片刃状である。125は中央下部から刃部を欠くものである。全面に磨き痕が認められ、全体を円柱状に仕上げている。126は扁平状の礫を利用し、刃部や基部の一部を磨っているだけの石斧状である。127は平面形態が三角形状の扁平な礫を利用し、刃部は表裏両面を打ち欠いて仕上げられた両刃状となっている。128は礫核素材の大型のもので、片面に自然面が残っている。両側縁は成形調整のための加工を施し、刃部は片面加工を施しているもので、刃部は片刃状となっている。

凹石：129～139の11点である。129、130は扁平で棒状を呈する礫の一面や全面に敲打の作用が弱い敲打痕が見られる。131～139は扁平な円礫や長楕円形状の礫の表裏面や片面に敲打痕が複数見られる。凹みは明瞭に見られるものと敲打作用が不明瞭なものがある。

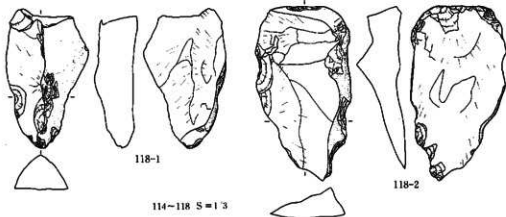
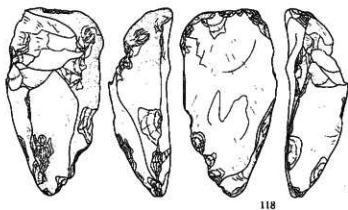
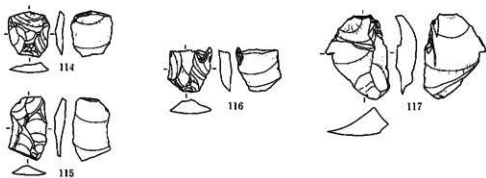
磨石：140～150の10点である。140～147は棒状や楕円形状そして円形状の扁平な礫の一部や全面を磨っているもので、磨面以外は自然面である。148～150は断面三角形状の棒状で礫の縁辺部分に細長い平坦面があり、その部分は磨きによって作りだされている。148では2面に磨き痕が見られ、150では礫の頂部2面と1側面が磨られている。

砥石：151の1点である。方形形状の石の一面に擦り痕が見られる。石質は流紋岩である。

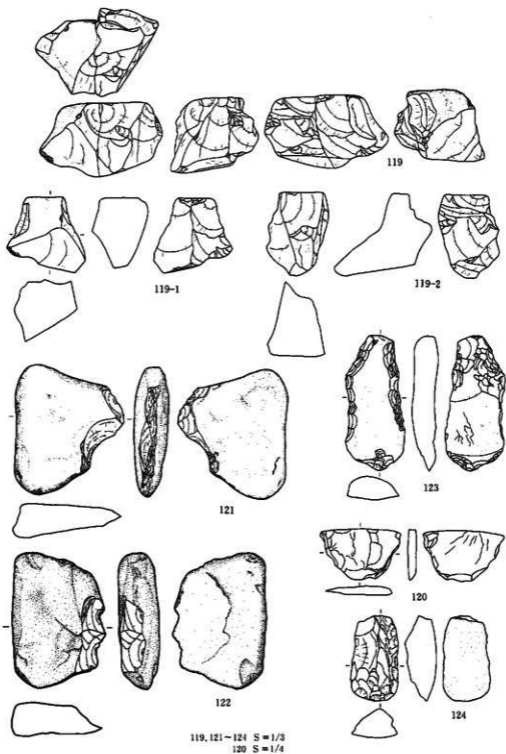
独結石：152の1点である。半分が欠損している。断面は扁平形で節がやや高くなっている。表裏全面とも成形の為の擦り痕が見られる。



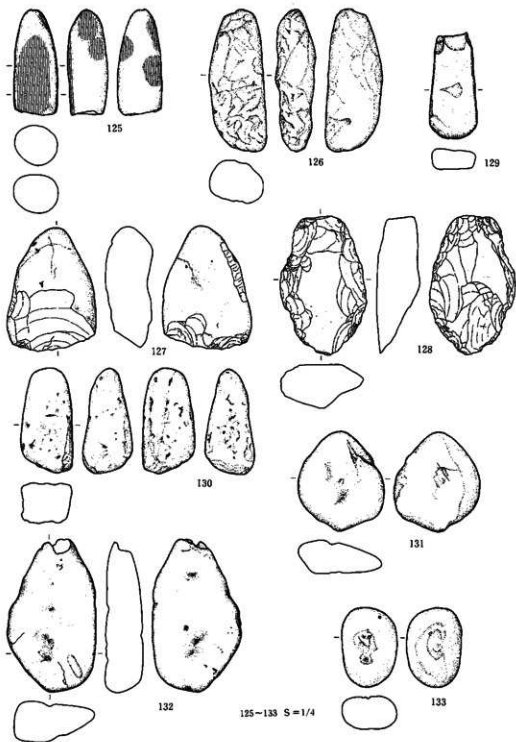
第27圖 遺構外出土遺物3



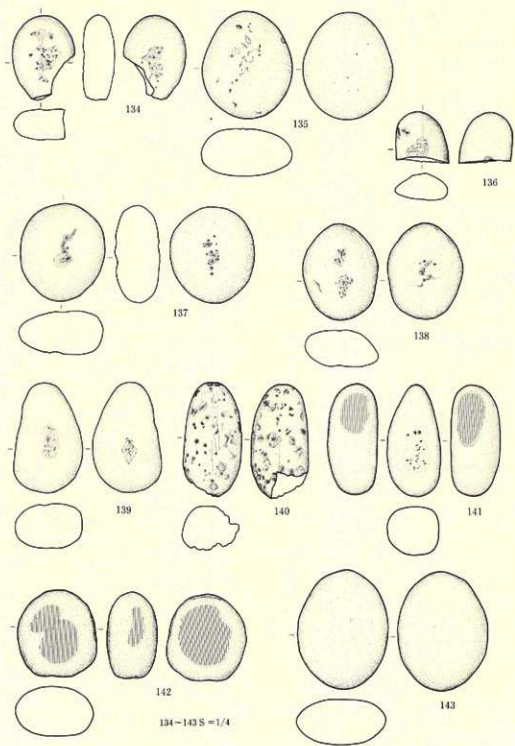
第28圖 遺構外出土遺物4



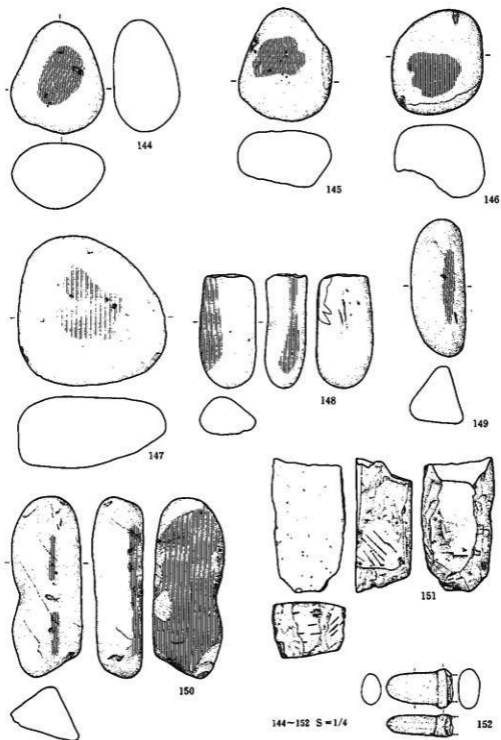
第29圖 遺構外出土遺物5



第30圖 遺構外出土遺物6



第31圖 遺構外出土遺物 7



第32圖 遺構外出土遺物B

土器観察表 遺構外

No	調査番号	写真番号	出土地点	器種	器体	法量(測定値)			外周調整			内周調整			成形	取り出し	その他
						口径径cm	底径cm	器高cm	口径部	器体	底部	口径部	器体	底部			
57	25-57	9-57	田原第	土師器	杯	(30.2)	(4)	3.1	ミガキ	ミガキ	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	-	
58	25-58	9-58	J231層下位	土師器	高台付杯	-	7.8	-	-	-	-	-	-	ミガキ	ロクロ	-	
59	25-59	9-59	J5	土師器	壺	-	8	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	
60	25-60	9-60	E21層下位	灰土器	高台付壺	-	(3.8)	-	-	-	-	-	-	捺引き刷	ロクロ	-	透かし有

土器観察表 遺構外

No	調査番号	写真番号	出土地点	器種	部位	法量(測定値)			文 様 等	そ の 他
						口径径cm	底径cm	器高cm		
61	25-61	9-61	J181層下位	鉢	口縁部片	-	-	-	雲形文?	
62	25-62	9-62	E223層上位	鉢	口縁部片	-	-	-	外面沈線と突起, 内面沈線1条	
63	25-63	9-63	J231層下位	鉢	口縁部片	-	-	-	外面沈線文	
64	25-64	9-64	E27%	鉢	口縁部片	-	-	-	外面口縁部に沈線2条, 地文L R	
65	25-65	9-65	E28層	鉢	口縁部片	-	-	-	波状口縁	
66	25-66	9-66	E28層	壺	口縁-唇部片	7.5	-	-	工字文	
67	25-67	9-67	E264AD	甕	口縁-唇部片	(3.3)	-	-	外面口縁部よりに沈線3条 内面口縁部よりに沈線1条, 地文L R	
68	25-68	9-68	G26層上位	甕	口縁-唇部片	(7.2)	-	-	地文L R	
69	25-69	9-69	D25層	甕	底部	2.9	4.4	8.2	無文	
70	25-70	-70	C23層	甕	頸部-唇部片	-	(6)	-	無文	内外面に糸がついている
71	25-71	10-71	D25層	甕	口縁部片	(7.1)	-	-	無文	
72	25-72	10-72	C23層	甕?	口縁部片	-	-	-	外面口縁部に沈線3条	
73	25-73	10-73	G24層	甕?	口縁部片	(3.4)	-	-	平行沈線	外面に糸が付着
74	25-74	10-74	G27層中位	甕	口縁部片	(30.4)	-	-	外面口縁部よりに沈線2条 内面口縁部よりに沈線1条	L R 無文後に横ひナア
75	25-75	10-75	D27層	鉢	口縁部片	-	-	-	口縁に突起あり, 内面口縁に沈線1条 外面口縁に沈線2条	内外面に夾置物付着
76	25-76	10-76	D28層	鉢	口縁部片	-	-	-	口縁に突起あり, 内面口縁に沈線1条 外面口縁に沈線2条	
77	25-77	10-77	G25層上位	鉢	口縁部片	-	-	-	波状口縁 地文L R 内面に沈線1条, 外面に沈線1条	
78	25-78	10-78	G26層	鉢	口縁部片	-	-	-	口縁に突起あり, 内面口縁に沈線1条	
79	25-79	10-79	E26層	鉢	口縁部片	-	-	-	口縁に突起あり, 内面口縁に沈線1条 地文L R	
80	25-80	10-80	D26層	鉢	口縁部片	-	-	-	内面沈線1条, 外面沈線2条	
81	25-81	10-81	D27層	鉢	口縁部片	-	-	-	内面沈線1条, 外面沈線2条	
82	25-82	10-82	G241層中位	鉢	口縁部片	-	-	-	地文L R	内外面に夾置物付着
83	25-83	10-83	C25層上部	甕	口縁唇部片	(32.4)	-	-	地文L R	口唇部に地文L Rの残存
84	25-84	10-84	G26層	甕	口縁部片	-	-	-	地文L R	
85	25-85	10-85	G27層上位	甕	口縁部片	(18.8)	-	-	地文L R	
86	25-86	10-86	D28層	甕	口縁部片	-	-	-	地文L R	
87	25-87	10-87	E28層	鉢	口縁部片	-	-	-	地文L R	
88	25-88	10-88	H26層	高杯?	唇部片	-	-	-	平行沈線	
89	25-89	10-89	D29層	高杯	台盤片	-	-	-	沈線文	
90	25-90	10-90	D291層	高杯	台盤片	-	(6)	-	沈線文	
91	25-91	10-91	G241層中位	高杯	台盤片	-	-	-	沈線文	
92	25-92	10-92	G25層上位	鉢	底盤片	-	5.7	-	地文L R	
93	25-93	10-93	G27層上位	鉢	底盤片	-	(7.2)	-	地文L R	
94	25-94	10-94	E241層下位	鉢	口縁部片	-	-	-	地文L R	
95	25-95	10-95	E241層下位	鉢	口縁部片	-	-	-	無文	

石器一覽表

№	調査番号	写真番号	出土地点	器種	計測値				石質	産地	備考
					長さcm	幅cm	厚さcm	重量g			
1	16-52	11-52	F23土坑Ⅱ	石鏃	4.6	1.1	0.4	4	珧質細粒燧石	奥羽山地新第三系中新統	
2	16-53	15-53	F23土坑Ⅱ	石鏃	25	25.4	5.6	3,720	石英火山岩	奥羽山地新第三系中新統	
3	27-99	11-99	C14 I層中位	石鏃	7.4	3.1	0.5	15	凝灰質珧質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
4	27-100	11-100	C10層中位	石鏃	7.5	3.6	1.7	56	珧質粗粒燧石	奥羽山地新第三系中新統	
5	27-101	11-101	G24層	石鏃	6.3	5.5	1.1	45	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
6	27-102	11-102	D27層	石鏃	6.3	3	1.5	33	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
7	27-103	11-103	C27層上段	石鏃	12.8	5.6	1.9	140	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
8	27-104	11-104	G22層	鏃頭	8.9	4.2	2.2	90	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
9	27-105	11-105	D28層下段	鏃片	4.4	3.6	1.1	30	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
10	27-106	11-106	E24層中位	不定形	3.9	2.4	0.7	8	鉄石	時代不詳	
11	27-107	11-107	I24層	不定形	4.7	5.6	1.1	38	珧質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
12	27-108	11-108	D24 I層下段	不定形	4.8	6.7	1.1	29	珧質粗粒燧石	奥羽山地新第三系中新統	
13	27-109	11-109	I25	不定形	6.5	8	1.6	105	珧質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
14	27-110	11-110	F28 I層	不定形	6	6.7	1.8	83	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
15	27-111	11-111	D11層	不定形	5.5	5	1	34	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
16	27-112	11-112	G27	不定形	4.6	7.1	1.5	48	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
17	27-113	11-113	G27層	不定形	6.1	5.4	1.1	32	珧質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
18	28-114	11-114	E26層上段	鏃片	3.5	3.3	0.7	10	カホンフェルス	磐前山古生帯	
19	28-115	11-115	E26層	鏃片	5	2.9	0.8	10	カホンフェルス	磐前山古生帯	
20	28-116	11-116	E25層	鏃片	3.4	3.3	1.2	12	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
21	28-117	11-117	D23 II層	鏃片	4.2	4.6	0.7	14	硬質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
22	28-118	12-118	C12 V層中位	鏃片	14.9	7.5	4.6	570	硬質燧石	奥羽山地中新統 10.5cm・6.5cm・3.1cm・200g 14cm・7.5cm・4.4cm・370g	
23	28-119	12-119	G13 V層上段	鏃片	5.9	9.2	6.6	348	硬質燧石	奥羽山地中新統	
24	28-120	12-120	C20層	鏃片	4.1	6.5	1	30	流紋岩	奥羽山地新第三系中新統	
25	28-121	12-121	F28 I層下段	鏃頭	13.7	11.4	3.6	580	硬質燧石	北上山地古生帯	
26	29-122	12-122	E24 I層下段	鏃頭	11	7.4	2.7	318	流紋岩質粗粒燧石	奥羽山地中新統	
27	29-123	12-123	C23 I層下段	片断石片	10.8	4.7	1.8	110	珧質細粒燧石	奥羽山地新第三系中新統	
28	29-124	12-124	I24層	片断石片	6.8	3.8	2.4	70	カホンフェルス	磐前山古生帯	
29	30-125	12-125	D23層	石片	11	4.1	4.3	380	輝石火山岩	奥羽山地新第三系中新統	
30	30-126	12-126	C20 I層下段	石片	15	5.8	4.3	495	カホンフェルス	磐前山古生帯	
31	30-127	12-127	E23層	石片	12.8	9.3	4.7	875	流紋岩	奥羽山地新第三系中新統	
32	30-128	12-128	C20層下段	石片	14.6	8.9	4.6	740	硬砂岩	北上山地古生帯	
33	30-129	12-129	C22層	石片	10.9	5.1	2.2	230	鉄石	時代不詳	
34	30-130	12-130	C24 I層下段	石片	11	5.5	5.2	430	両輝石火山岩	奥羽山地中新統	
35	30-131	12-131	F25層	石片	10.6	9	3.5	400	石質燧石	奥羽山地中新統	
36	30-132	12-132	D26層中位	石片	16	9.4	4.4	570	凝灰質燧石	奥羽山地新第三系中新統	
37	30-133	12-133	F26凝灰質土	石片	8.5	5.8	3.6	260	凝灰質燧石	奥羽山地中新統	
38	31-134	13-134	G24 I層上段	石片	8.8	6.6	3.2	285	凝灰質燧石	奥羽山地中新統	
39	31-135	13-135	F25 I層	石片	11.3	9.5	5	840	両輝石火山岩	奥羽山地中新統	
40	31-136	13-136	E27燧石	石片	5.3	5.5	2.9	60	凝灰質燧石	奥羽山地中新統	
41	31-137	13-137	C21 I層	石片	10.3	8.9	4.6	620	両輝石火山岩	奥羽山地中新統	
42	31-138	13-138	G24 I層下段	石片	6.2	8	3.3	450	両輝石火山岩	奥羽山地中新統	
43	31-139	13-139	C29 I層下段	石片	11.6	7.1	4.7	460	凝灰質燧石	奥羽山地中新統	
44	31-140	13-140	F28層	燧石	12	6	4.8	300	燧石(石灰化した)	時代不詳	
45	31-141	13-141	F26層	燧石	11.9	5.7	5.1	500	両輝石火山岩	奥羽山地中新統	
46	31-142	13-142	I25	燧石	9.2	8.3	5.3	640	輝石火山岩	奥羽山地新第三系 新統or中新統	
47	31-143	13-143	D28層	燧石	12.7	9.5	4.9	860	凝灰質燧石	奥羽山地中新統	
48	32-144	14-144	E25層	燧石	11.9	9.8	6.9	800	輝石火山岩	奥羽山地新第三系 新統or中新統	
49	32-145	14-145	C24 I層	燧石	11.9	9.8	5.9	750	凝灰質燧石	奥羽山地中新統	
50	32-146	14-146	E25層	燧石	11	9.8	7.5	1,120	花崗閃緑岩	北上山地古生帯	
51	32-147	14-147	凝灰	燧石	15.8	15.6	7.5	2,300	粗粒燧石	奥羽山地中新統	
52	32-148	15-148	E26層	燧石	12	5.9	3.9	550	凝灰質燧石	北上山地古生帯	
53	32-149	15-149	J25 I層中位	燧石	14.5	7	5.9	660	凝灰質燧石	奥羽山地中新統	
54	32-150	15-150	G24	燧石	18.8	7.3	5.4	1,040	粗粒燧石	奥羽山地中新統	
55	32-151	15-151	D27層	燧石	13.7	7.5	5.8	780	凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	
56	32-152	15-152	D11 I層	燧石	4.2	7	2.2	85	流紋色燧石	奥羽山地中新統 石製品	

2. まとめ

八幡館跡の遺構、遺物について述べてきたが、当初予想された館としての遺構、遺物は発見されなかったが、平安時代の住居跡や縄文時代の土坑や陥し穴状遺構、それに弥生時代の土器等が発見され、当遺跡のある地域が縄文時代から現代まで様々な利用の仕方をされていたことが窺えた。以下、遺構から簡単にまとめてみたい。

(1) 遺構

遺構は住居跡、土坑、陥し穴、焼土遺構、溝が検出されている。

住居跡は調査区の東側の沢沿いに一定の間隔を置いて4棟検出されている。4棟とも出土遺物から平安時代の住居跡であり、遺構の規模は4m前後の比較的小型の住居で、平面形は方形状であり、いずれも黒褐色土面から掘り込まれ、褐色土上面が床面となっている。竈は不明の1基を除いて構築される位置や方位に違いが見られるが、構築される壁面の隅に寄る特徴がある。これら住居は竈の構築方位に違いがあるものの、一定の間隔で検出されていることや、出土遺物から一時期に営まれていた可能性があり、これらの住居の所属する時期は出土遺物から9世紀末から10世紀初頭頃に位置づけられると考える。また、住居の検出状況から沢沿いの南側にも住居の存在が考えられる。

土坑は平面形態や検出状況、埋土の状態から、長方形土坑は平安時代頃と考えられる。楕円形状や円形状の土坑は出土遺物等から縄文時代晩期終末から弥生時代に比定される。

陥し穴状遺構は平面形態が長方形状と溝状がある。長方形のものには底面に逆茂木のあるものもある。埋土は何れも埋め戻されている土層が上部に、下位は自然層となっている。土層の状態や出土遺物等から、縄文時代晩期中葉以降と考えられる。この土坑は田村(1987)の分類によるB型(長楕円形若しくは長方形を呈するもの)に入り、その中のB1型に相当する。溝状のものは県内に広く検出されているもので、縄文時代の陥し穴として捉えて構わないものである。

焼土遺構や溝は基本土層Ⅱ層面に見られるものであるが時期を特定できるものはないが溝が住居跡を切り、焼土遺構は溝を切っていることから比較的新しい時期かと考えられる。

(2) 遺物

本遺跡から出土した遺物には、奈良・平安時代の土師器・須恵器・鉄製品・土鍾、弥生時代の土器、縄文時代の土器・石器等である。出土量としては全体的に少ない。

① 土器

古墳・奈良・平安時代の土器：古墳・奈良時代の土器は遺構外から57、60の2点出土している。57はロクロ不使用のもので、内面黒色処理され内外面にミガキが施された土師器坏破片であり、詳細については良く分からないが、ロクロ不使用であることや器面の特徴から奈良時代

と思われる。60は須恵器の高台付き杯の脚部破片で残された特徴から長脚2段3方透かしのものと思われ胎土や特徴から東海系のものと考えられ、6世紀末から7世紀初頭に位置づけられよう。同様の特徴を持つものとしては水沢市麗性遺跡のD-8住居出土のものと同じ器形と考えられる。平安時代の土器は2点が遺構外から出土しているが、主に住居の埋土等からの出土である。器種は、土師器が坏(18個)、高台付き坏(4個)、蓋(1個)、高台付き耳皿(1個)、鍋(1個)、甕(17個)と須恵器の甕(1個)である。坏は総数18個の内、内面黒色処理を施したものの4個、内外面ともに黒色処理を施さないもの14個である。何れもロクロ使用で底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。高台付き坏は4点の内、内面黒色処理を施したものは3点で、1点が内外面とも黒色処理を施さないものである。底部の切り離し技法は不明なものもあるが回転糸切りである。高台部は外れて分からないものが多いが、短脚で「ハ」字状に開くものである。蓋は内外面とも黒色処理が施され、ミガキを施している。ロクロ使用か不使用か不明である。高台付き耳皿は内外面とも黒色処理が施されたもので、高台部は短脚のもので、皿部分の形状は楕円形状である。ロクロからの切り離し技法は回転糸切りである。鍋は破片が出土している。甕はロクロ使用のものか不使用のものかがほぼ同数ある。これら平安時代の土器の時代は9世紀末から10世紀初頭に位置づけられるものである。また、I25住居に墨書されている「且」の文字が見られる坏が1点ある。何かの字を真似た異字体のようであるが、破片であることから判読できないものである。同様な字体は茨城県鹿の子C遺跡の67号竈穴住居跡出土の須恵器高台付き杯の底面にかかっている「且」のものがある。

弥生時代の土器：調査区の東側の基本土層Ⅱ層中から主に出土しているが破片であり、全体を把握するものが少ないため良く分からないが、出土している土器の文様から谷起鳥式土器に比定されるものである。

縄文時代の土器：出土点数が少なく文様等もはっきりしないが、縄文時代晩期末様に比定できるものである。

② 石器

石器は出土器種として、剥片石器類では石鏃1点、石匙1点、石筥ないし石筥状4点、不定形石器類8点、礫石器類では礫器、石斧、凹石、磨石、砥石など計31点、独鈷石1点である。剥片石器類が少なく、中でもいわゆる定形的なものは少なく、破片の一部に使用痕ないし調整痕状のものが見られるものが殆どである。また、出土している石器類の中で基本土層のⅡ、Ⅲ層出土のものは縄文時代の晩期終末から弥生時代にかけてのものと考えられ、基本土層Ⅳ、Ⅴ層のものは縄文時代でも初期の頃のものと考えられる。

(3) 遺跡の性格

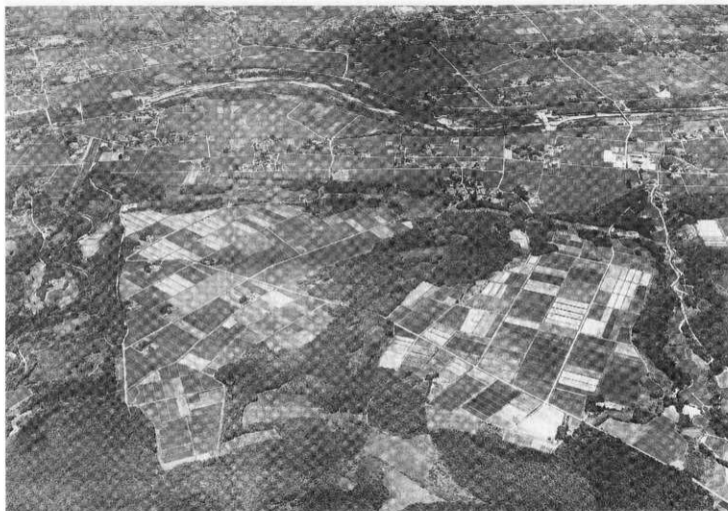
本遺跡は以上述べてきたように、遺構は沢沿いの東側の縁辺に見られ、遺物も多くが沢沿い

に検出されたが、今回の検出状況からそれほど大きくない集落を形成していたと考えられる。さらに今回の調査区の北や南側にも幾らか遺構があると推測される。また、陥し穴があることから、狩猟の場としても使われていたことが明らかになった。また、出土遺物からは縄文時代の古い時代から弥生時代を経て平安時代まで様々な場の使われ方が成されていたことが今回の調査で明らかになった。

<参考文献>

- | | | |
|--------------|--------|--|
| 岩手県立博物館 | (1982) | 『岩手の土器』 |
| 岩手県埋蔵文化財センター | (1981) | 『水沢市勝性遺跡』岩手県埋蔵文化財報告書第34集 |
| 田村社一 | (1987) | 『陥し穴状遺構の形態と時期について』『紀要Ⅷ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 中村浩 | (1981) | 『和泉陶巴窯の研究』柏書房 |
| 渡辺春伸 | (1980) | 『東北古墳時代須恵器の様相と編年』考古学雑誌第65巻第4号 |
| 渡辺春伸 | (1990) | 『東北の須恵器出現の様相』月刊考古学ジャーナルNo.316 |
| 茨城県教育財団 | (1983) | 『蓮の子C遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第20集 |
| 岩手県和賀町 | (1977) | 『和賀町史』 |

月 館 跡
写 真 図 版



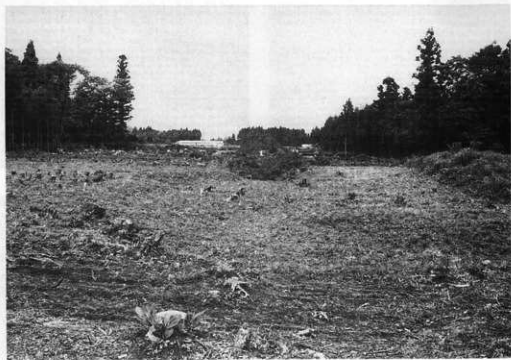
写真図版1 月館跡・八幡館跡遠景



写真図版2 月館跡・八幡館跡空中写真

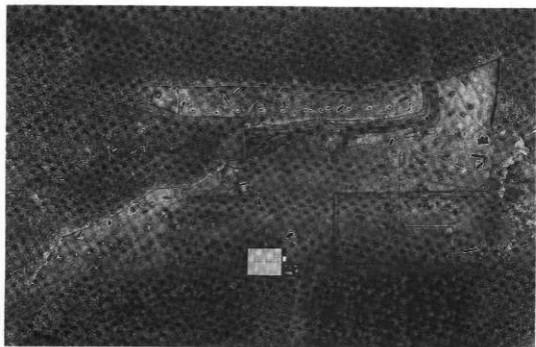


遺跡遠景（空中写真）

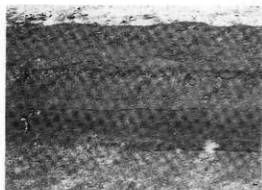


調査前近景（東より）

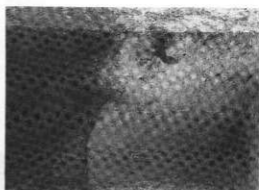
写真図版3 調査区全景・遺跡近景



遺跡全景



G16区土層断面



E22区土層断面



作業風景



J4区土器出土状況

写真図版4 調査区全景(完掘後)他



堀跡・郭全景 (東より)



柱穴(櫓列)No.1 平面



断面



柱穴(櫓列)No.2 平面



断面



柱穴(櫓列)No.3 平面



断面



柱穴(櫓列)No.4 平面



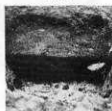
断面



柱穴No.1~4 平面



柱穴(櫓列)No.5 平面



断面



柱穴No.1 断面



柱穴No.2 断面

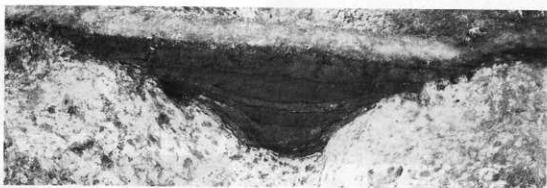


柱穴No.3 断面

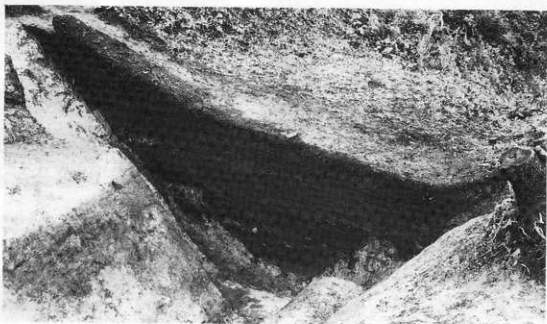
写真図版5 堀跡・櫓列・柱穴



断面No 1 (A-B)

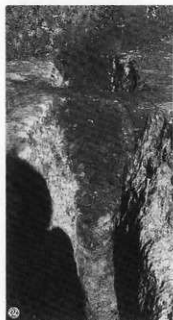
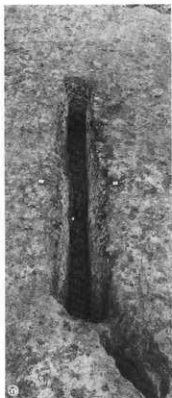


断面No 2 (C-D)



断面No 5 (I-J)

写真図版6 堀跡土層断面

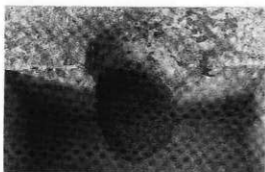


1. B11陥し穴状遺構平面
2. " " 断面

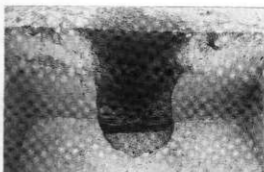
3. C10陥し穴状遺構平面
4. " " 断面

5. J21陥し穴状遺構平面
6. " " 断面

写真図版7 陥し穴状遺構(1)



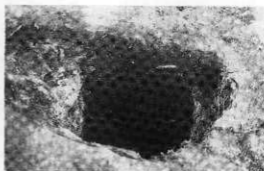
E22陥し穴状遺構 平面



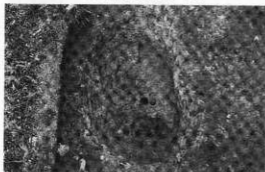
断面



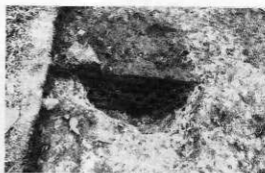
C 8 陥し穴状遺構 平面



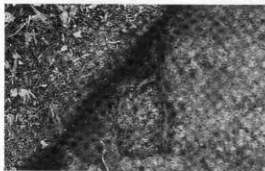
断面



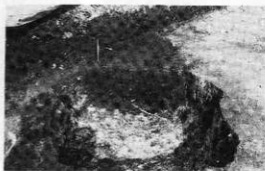
H 6 陥し穴状遺構 平面



断面



B 13 陥し穴状遺構 平面



断面

写真図版8 陥し穴状遺構(2)



E18 陥し穴状遺構 平面



断面



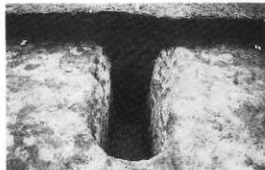
F22 陥し穴状遺構 平面



断面



H12 陥し穴状遺構 平面



断面

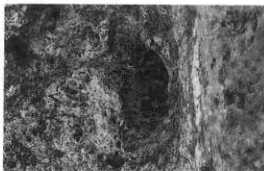


I13 陥し穴状遺構 平面



断面

写真図版9 陥し穴状遺構(3)



D20 土坑 平面



断面



H5 土坑 平面



断面



土壘状遺構・溝跡No.3 (北より)



溝跡No.8 (東より)

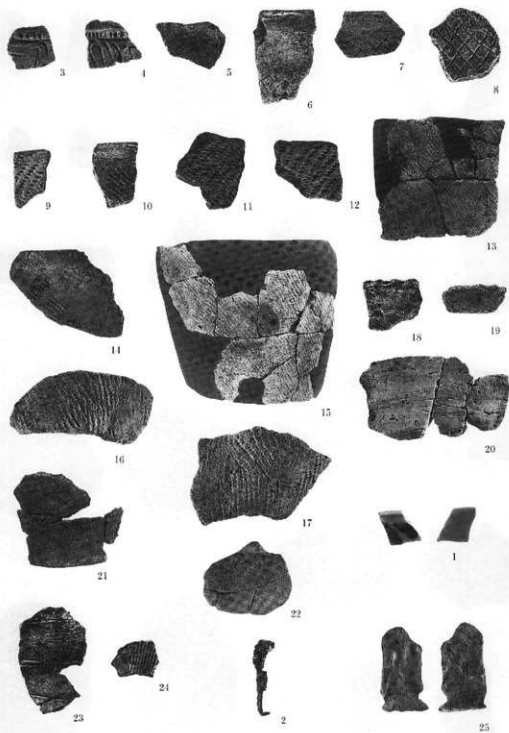


溝跡No.6 (北より)

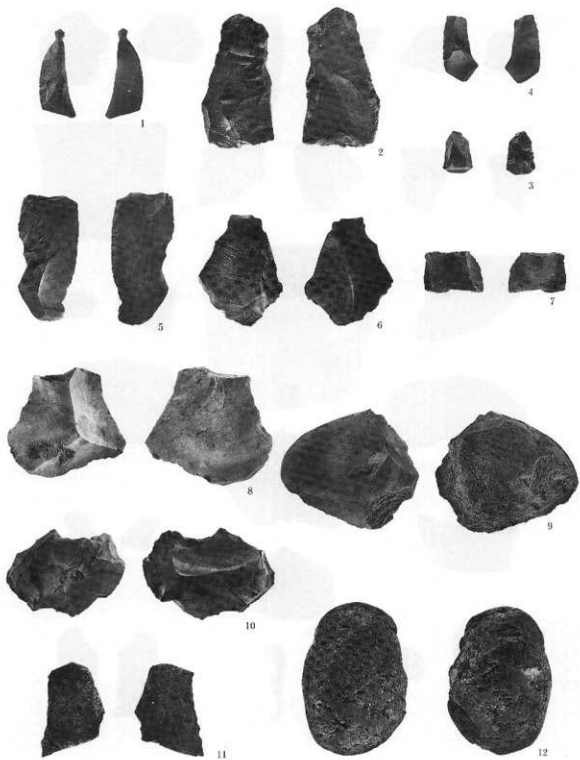


溝跡No.6 断面

写真図版10 土坑・土壘状遺構・溝跡



写真図版11 土器・鉄製品・陶磁器他



写真図版12 石器

八 幡 館 跡
写 真 図 版



遺跡現状 刈り払い後



G25グリッド深掘り(基本土層)



作業風景 刈り払い中



作業風景

写真図版1 現状・基本土層・作業風景



平 面



遺物出土状況



東西断面



南北断面



カマド検出状況



カマド燃焼部断面



カマド精査中 2

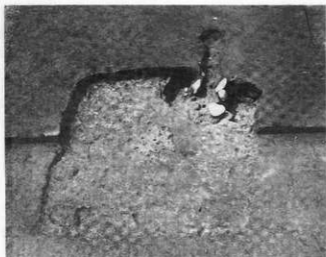


カマド精査中 1



カマド完備状況

写真図版 2 E-27住居跡



H-23住居跡 平面完掘後



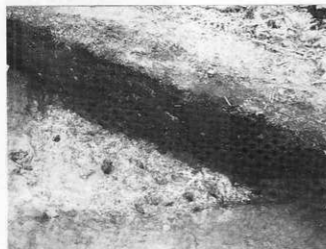
カマド全景



H-23住居跡 東西断面



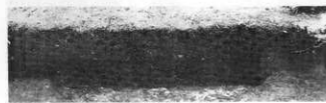
カマド燃焼部断面



H-26住居跡 完掘



H-23住居跡 土坑1 遺物出土状況



H-26住居跡 断面



H-23住居跡 土坑2 遺物出土状況

写真図版3 H-23・26住居跡



完掘



遺物出土状況



南北断面



東西断面



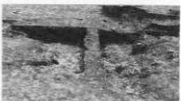
カマド精査中



カマド徳焼部断面



カマド完掘

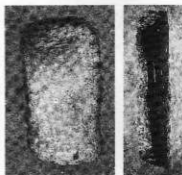
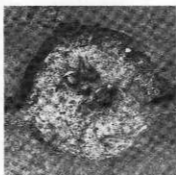
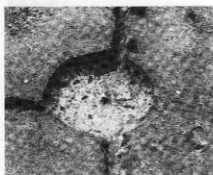


土坑断面



カマド脇土坑遺物出土状況

写真図版4 1-25住居跡

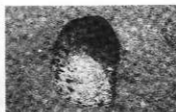


F23土坑No.1 石眼物出土状況

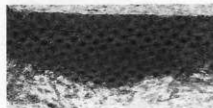
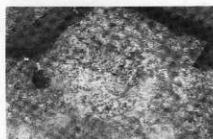
B31土坑 平面・断面



F23土坑No.1 平面・断面



F23土坑No.2 平面・断面



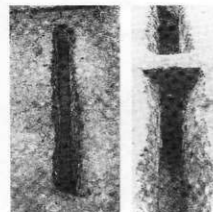
E26土坑No.3 平面・断面



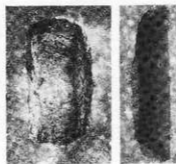
C29陥し穴状遺構No.2 平面



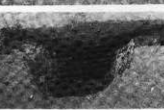
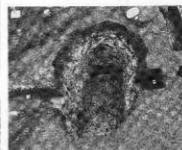
E26土坑No.2 平面・断面



H26陥し穴状遺構平面・断面



C29陥し穴状遺構No.1 平面・断面



E26陥し穴状遺構No.1 平面・断面

写真図版5 土坑・陥し穴状遺構



溝跡No1・2 平面



溝跡No3 平面



F26焼土検出状況



溝跡No1・2 断面



土器出土状況



土器出土状況



H26グリッド遺物出土状況



B12グリッド破砕片検出状況

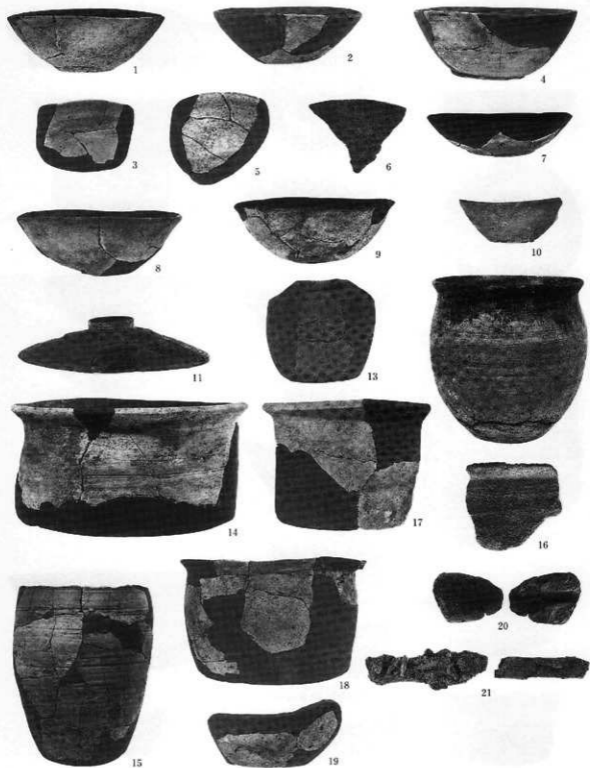


G12グリッド破砕片出土状況

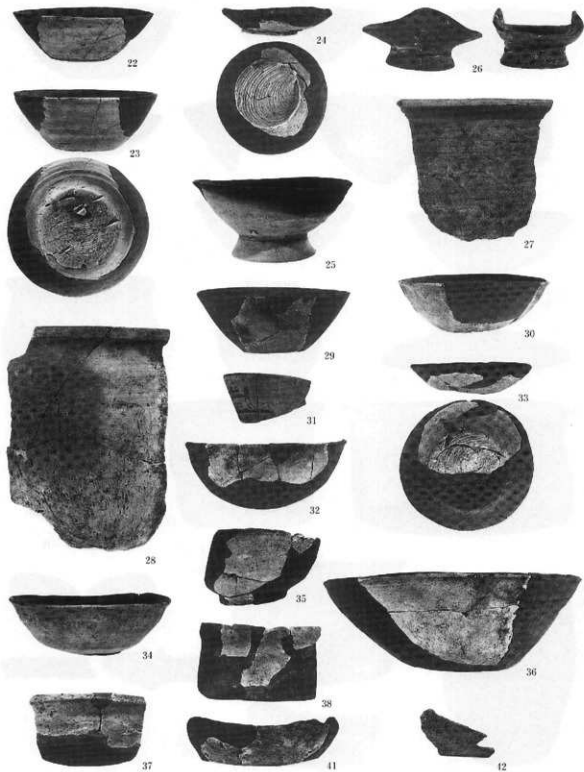


B12グリッド破砕群下から検出された破片

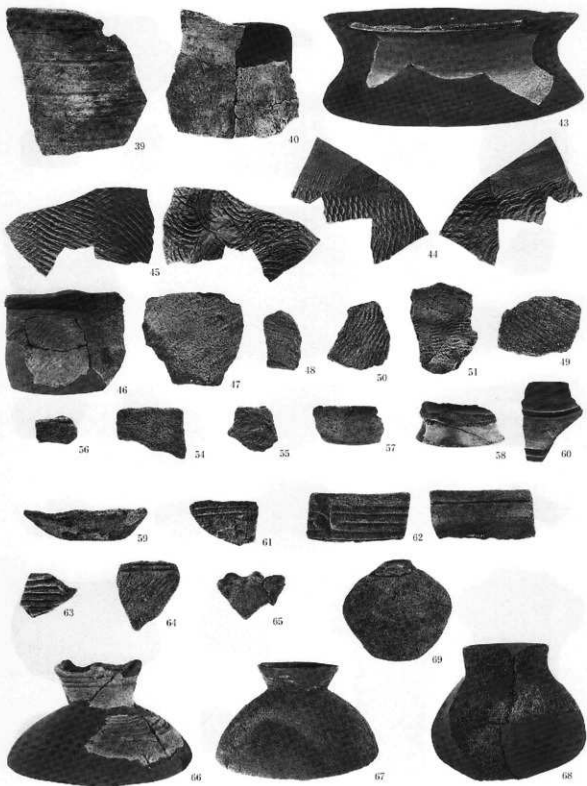
写真図版6 溝跡・焼土・遺物出土状況



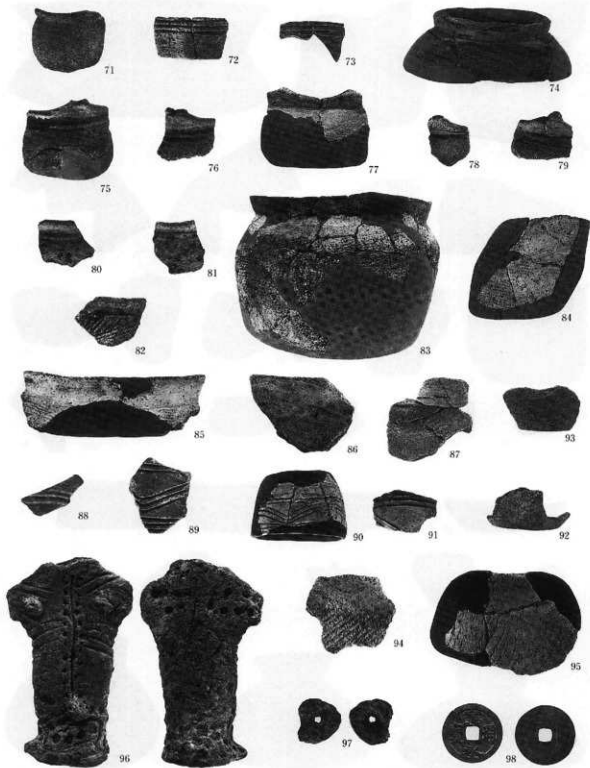
写真図版7 土器・土製品・鉄製品



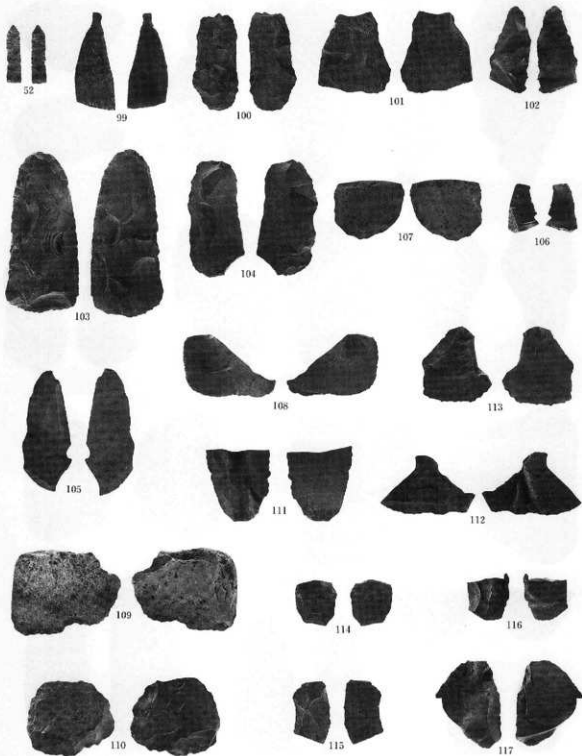
写真図版 8 土器 2



写真図版9 土器3



写真図版10 土器4・土製品・古銭



写真図版11 石器 1



118

119



118-1

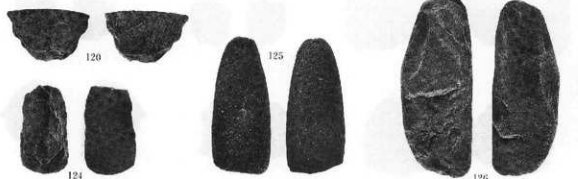
118-2

123



121

122



120

125

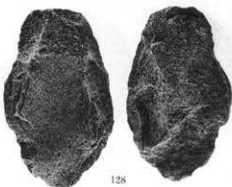
124

126

写真図版12 石器2



127



128



129

130



131



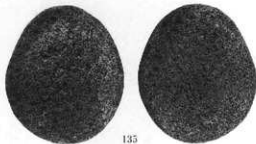
132



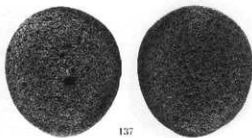
133



134

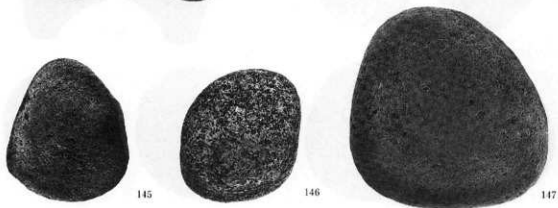
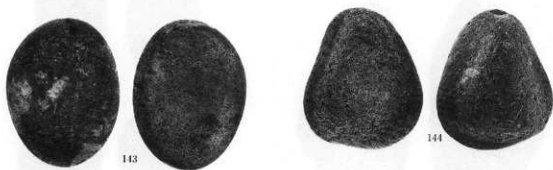
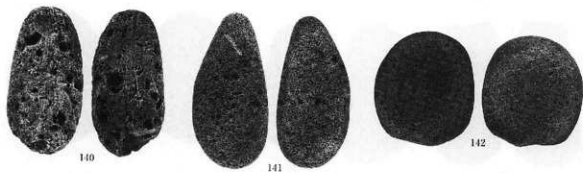
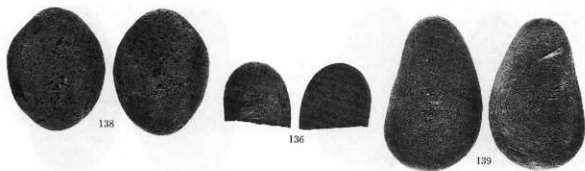


135

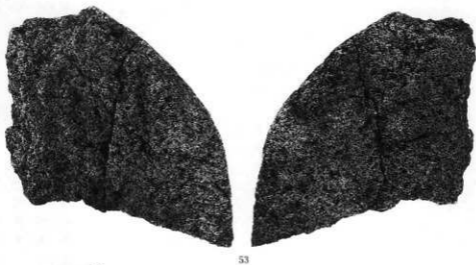
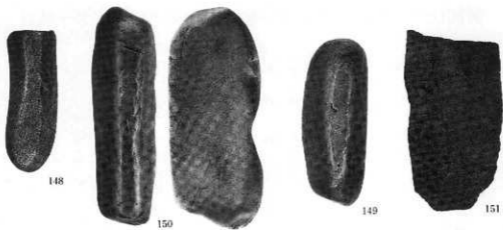


137

写真図版13 石器3



写真図版14 石器4



写真図版15 石器5

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 所 長	小笠原 喜 一						
副 所 長	米 澤 康 雄						
【管理課】							
管理課長(兼) 課長補佐 主 事	米 澤 康 雄 森 岡 陽 一 阿 部 隆 広	嘱 託 運 転 技 士 業 技 能 員	〃	吉 田 一 男 山 館 春 男 佐 藤 春 男			
【調査課】							
調査課長 兼 課長補佐 主任文化財 専門調査員	昆 野 靖 佐々木 嘉 直 小田野 哲 憲 三浦 謙 一 工藤 利 幸 高橋 興右衛門 平井 村 良 進 中川 川 重 一 中藤 高 敏 紀 高 藤 敏 男 斎 藤 實 介 佐 瀬 隆 千 瀬 孝 雄 東 海 林 博 司 佐々木 幹 弘 川 村 木 均 鈴木 貞 行 伊 藤 東 悟 斎 藤 邦 修 神 田 敏 雄 明		文 化 財 専 門 調 査 員	佐々木 信 一 小 原 眞 一 村 上 宗 孝 酒 井 健 速 松 本 昭 彦 金 田 常 久 濱 菅 仲 裕 相 原 川 部 及 阿 部 池 菊 苑 川 明 及 星 森 下 鈴 鈴 木 菊 菊 地 藤 藤 村 千 久 保 大 久 谷 熊 大 久 保 博		期 限 付 専 門 職 員	
	〃						
	〃						
	〃						
	〃						
文 化 財 専 門 調 査 員	〃						
〃	〃						
〃	〃						
〃	〃						
〃	〃						
〃	〃						
〃	〃						
〃	〃						
〃	〃						
〃	〃						
	〃						
【資料課】							
資料課長 主任文化財 専門調査員	高 橋 薫 田 鎖 壽 夫						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第149集

月館跡・八幡館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 平成3年3月25日

発行 平成3年3月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185
電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 (株)吉田印刷
〒020 盛岡市名須川町23-27
電話 (0196) 25-2323